

宮城県文化財調査報告書第75集

宮城県営圃場整備関連  
遺跡詳細分布調査報告書  
(昭和55年度)

昭和56年3月

宮城県教育委員会

## 序

自然の豊かな宮城県には、有形、無形の貴重な文化財が数多く現存しています。なかでも埋蔵文化財は昭和55年12月現在で約5200箇所が周知されています。

しかし近年の急激な都市化の波に洗われ、その多くが消滅の危機に瀕しています。しかも開発に伴ない、最も保存の危ぶまれるのは埋蔵文化財であることも事実です。

地域の開発と埋蔵文化財の保護、保存の調整は関係各機関と綿密な連絡のうえに実施しているところであり、その効果が徐々にあらわされて各方面からの理解も得られるようになってまいりました。

本報告書は農業基盤整備事業関連の3遺跡（色麻古墳群、千賀田遺跡、三代河原遺跡）の詳細分布調査と1遺跡（根岸遺跡）の記録保存調査を昭和55年度国庫補助事業として実施した結果をとりまとめたものであります。前者は圃場整備事業を実施するに当たり、文化財保護上の協議資料を得るためにものであり、後者は設計及び工法変更等によっても現状保存の調整のつかなかった部分について、記録保存の調査を実施し、その概略についてとりまとめたものであります。

この報告書が研究者及び関係者のみならず、広く一般の方々に活用され、文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた多くの方々に、厚く御礼を申しあげます。

昭和56年3月

宮城県教育委員会

教育長 北村 潮

## 目 次

### 序

はじめに	1
I. 根岸遺跡	3
II. 色麻古墳群	57
III. 千賀田遺跡	67
三代河原遺跡	

## 例 言

1. 本書は県営圃場整備事業に関連する3遺跡の調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町村教育委員会の御協力をいただいた。
3. 本書の作成に際し、鳴子町在住の沢口滋氏に漆器に関する助言を得た。
4. 本書における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1967）を使用し、土性については国際土壤学会の粒形区分を参照した。
5. この報告書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図の「丸森」、「川渡」、「中新田」である。
6. 執筆編集は文化財保護課が行なった。各遺跡の担当者は次のとおりである。

根岸遺跡 澤谷 正三

色麻古墳群 阿部 恵

千賀田遺跡 土岐山 武

三代河原遺跡



1. 龙纹漆器出土状况 (A R - 101区)



2. 龙纹漆器出土状况 (A R - 101区)  
根岸清路出土遗物



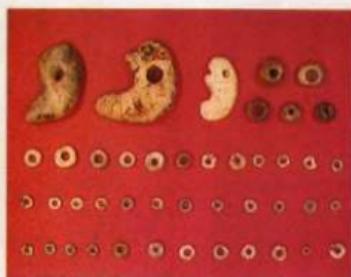
3. 土 僮 (BF-101区)



4. 耳飾・小玉 (AS-AT-100区)



5. 璜 (BA-100区)



6. 勾玉・小玉・白玉



7. 透器 (AS-100区)



8. 朱彩土器  
横岸遺跡出土遺物

## I はじめに

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業に係る3遺跡（色麻古墳群、千賀田遺跡、三代河原遺跡）の詳細分布調査と1遺跡（根岸遺跡）の記録保存のための調査を昭和55年度国庫補助事業として実施した。

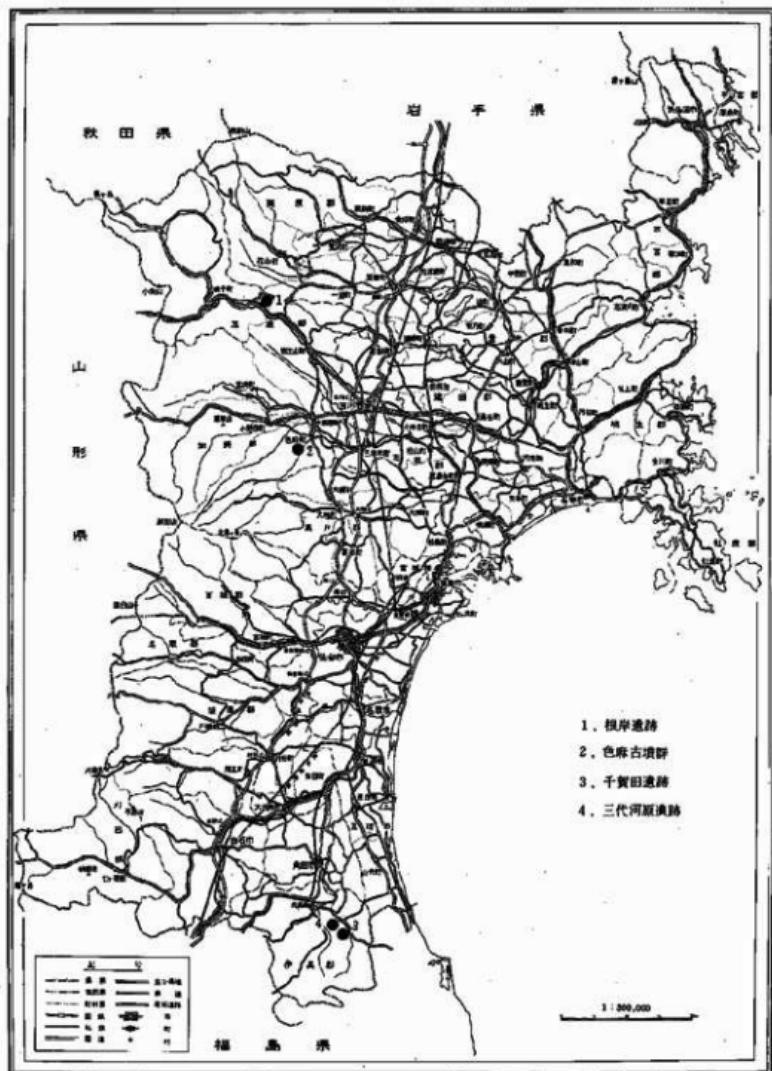
前者は、圃場整備事業を実施するに当たり遺跡保存のための協議資料を得ることを目的に遺跡の範囲、遺構の分布、遺跡の性格等を調査するものである。

後者は、協議により設計及び工法の変更等によってもなお現状保存のできかねた部分について記録保存の発掘調査を実施するものである。

色麻古墳群（上郷支群）は色麻町四釜地区の花川流域にある古墳時代後期から終末期にかけての群集墳であり、遺物包含地の広がりもある。圃場整備対象面積は906haでこの中に含まれる101基の古墳と19箇所の遺物包含地の保存資料を得るためにその一部について調査を実施したものである。調査の結果、No.7は周溝の遺存もなく古墳であるとする確認はできなかった。田中後遺跡では平安時代の遺物を包含する広がりを確認し、集落跡の可能性が十分考えられたので協議の結果盛土施工により保存することになった。

千賀田、三代河原遺跡は丸森町大内地区的雄尾川流域の低位河岸段丘上と、丘陵麓部に営なまれた縄文後・晩期の遺物包含地である。この地区的圃場整備対象面積は299haでこの中に11遺跡が含まれ、うち4遺跡については54年まで詳細分布調査のうえ現状保存（石神遺跡・七夕西遺跡・塙田古墳）と一部記録保存（中平遺跡）をすることができた。千賀田・三代河原遺跡については設計の変更によって現状保存の可能性が大きいことを確認している。

根岸遺跡は岩出山町一栗地区的江合川右岸の低位段丘上の縄文時代後・晩期の遺構・遺物を含む遺跡である。この地区的圃場整備対象面積は323.2haで54年度まで263.6haの事業が終了し、55年度は59.6haが整備対象である。昭和54年度の詳細分布調査の結果をもとに関係部局間で再三にわたる協議を重ねその大部分は設計の変更等で保存することになったが、排水路部分については記録保存の発掘調査を実施することになったものである。調査の結果、良好な遺物包含層の広がりが確認され、排水路の周囲は工法の変更により盛土し保存することになった。



遺跡位置図

# I 根 岸 遺 跡

## 調 査 要 項

**遺跡所在地**：宮城県岩出山町池月字根岸清水前6ほか

**調査主体者**：宮城県教育委員会

**調査担当者**：宮城県教育庁文化財保護課

**調査員**：阿部 博志・太田 昭夫

濱谷 正三・菊地 淳一

丹羽 茂・小井川和夫

加藤 道男・阿部 恵

新庄屋元晴・黒川 利司

**調査期間**：昭和55年7月7日～12月2日

**調査対象面積**：960 m<sup>2</sup>

**実発掘面積**：960 m<sup>2</sup>

**遺跡記号**：FT（宮城県遺跡地名表登録番号35063）

**協力機関**：岩出山町教育委員会

## 目 次

I 遺跡の位置と環境.....	5
II 調査の方法と経過.....	8
III 調査の成果.....	11
1 遺物包含層.....	11
2 発見された遺構.....	14
(1) 配石遺構.....	14
(2) 土壙.....	18
(3) 埋設土器.....	21
(4) 石臼炉.....	25
(5) 遺構について.....	26
3 出土遺物.....	28
IV まとめ.....	32

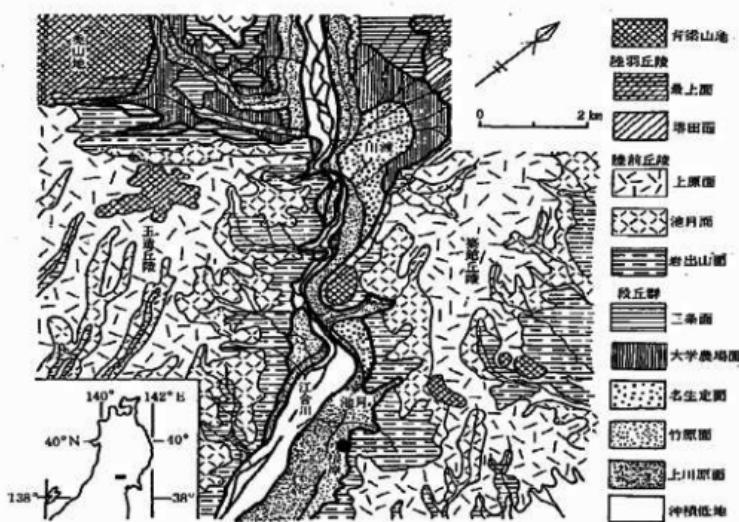
## I 遺跡の位置と環境

1 位置と自然環境

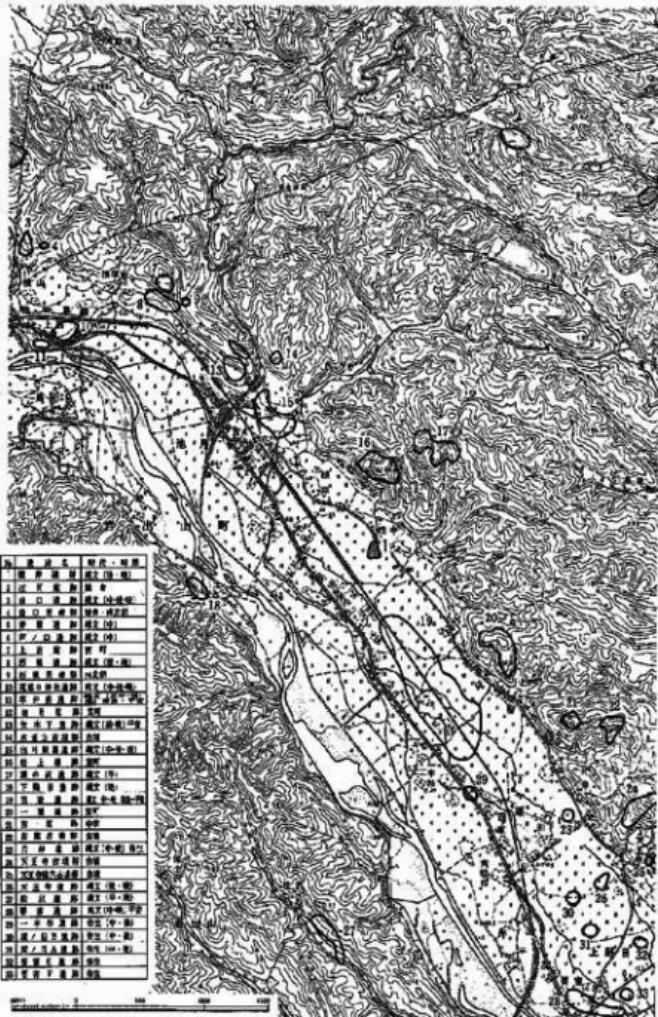
根岸遺跡は玉造郡岩出山町池月字根岸清水前に所在し、池月駅から北東1kmの地点に位置する。

岩出山町周辺の地形を概観すると、西には奥羽山地の一部をなす禿山地が、南には玉造丘陵が、北には築館丘陵が横たわっている。また、これらの丘陵間には河岸段丘が発達している。河岸段丘は荒雄岳に源を発する江合川や、その支流によって形成されたもので、形成された順に三条面、大学農場面、名生定面、竹原面、上川原面の5群が認められている（小元：1966）。これらの段丘の分布状況をみると、鳴子町では5群の段丘が江合川両岸に広範囲に認められるが、岩出山町に入ると名生定面、竹原面、上川原面の3群が認められ、その範囲は縮小していく。また、池月以東では竹原面、上川原面の2群が認められ、これらは特に江合川右岸に発達が著しい。

このように、この地域は丘陵や河岸段丘で大半が占められている。



第1図 岩出山町北西部地域の地形学図(小元:1966)



本遺跡は江合川右岸に発達する河岸段丘の竹原面上に立地している。遺跡周辺の微地形を見ると北から南に緩やかに傾斜しているが、東側に浅い沢が形成され、本遺跡は、この沢の出口西側に位置している。標高は約78~80m、現状は水田である。

## 2. 周辺の遺跡

江合川両岸に形成された河岸段丘及び玉造丘陵の南東部、築館丘陵の南部には、旧石器時代から近世にわたって、多くの遺跡が分布している。

旧石器時代の遺跡としては、昭和51年に発掘調査がなされた座散乱木遺跡をはじめ、宮城平遺跡、三太郎山遺跡などがあり、県内でも旧石器時代の遺跡が集中して分布していることが知られている。これらの遺跡は丘陵の頂部や斜面に立地している。微隆起線文土器が採集された座散乱木遺跡では、有舌尖頭器や彫刻刀形石器、ナイフ形石器などの他に日本最古の動物形土製品が出土し（石器文化談話会：1978），注目されている。

縄文時代の遺跡としては、座散乱木遺跡（早・前・晚）・遅の沢遺跡（早）・玉造遺跡（中・晚）、天王寺遺跡（晚）などが知られている。座散乱木遺跡や遅の沢遺跡は丘陵斜面に、玉造遺跡や天王寺遺跡は河岸段丘上に立地している。座散乱木遺跡では早期末の竪穴住居跡が1軒検出されている（同上）。また、玉造遺跡では中期末大木10式期に属する竪穴住居跡が4軒検出され、これらの大半が住居跡内に複式炉を有していることが明らかにされた（千葉：1980）。

弥生時代の遺跡としては、片岸遺跡（中・後）、一本杉遺跡（中・後）、九十九沢遺跡（後）、西天王寺遺跡（後）などが知られている。九十九沢遺跡・西天王寺遺跡など多くの遺跡は、玉造丘陵南東部斜面や築館丘陵南部に立地しているが、片岸遺跡や一本杉遺跡などは河岸段丘上に立地している。片岸遺跡では樹形圓式・十三塚式に属する土器片（佐藤・藤原：1980）が、西天王寺遺跡では天王山式系に属する土器片（県教委：1978）が採集されている。

古墳時代から奈良・平安時代の遺跡としては、座散乱木遺跡（古墳前・奈良・平安）、木戸脇裏遺跡（古墳前・奈良・平安）、玉造遺跡（平安）などがある。この時期になると殆んど多くの遺跡は玉造丘陵南東部及び築館丘陵南部に分布する傾向が窺え、しかも縄文時代・弥生時代の遺跡と複合して存在するものが目立つ。河岸段丘上に立地する数少ない遺跡の中でも玉造遺跡では平安時代表杉ノ入式期に属する竪穴住居跡が5軒検出され、集落跡の一端が明らかにされた（千葉：1980）。また、築館丘陵南部には古墳が群をなして密集しているが、中でも推定数百基の規模をもつと考えられる川北横穴古墳群や古館古墳群、水道山古墳群などが知られている。

中世の遺跡としては、古館跡・岩上館跡・一栗城跡などが知られている。

## II 調査の方法と経過

一栗地区的県営圃場整備事業が本遺跡の所在する地区に及ぶこととなったため、54年度に遺跡の範囲確認とその内容把握を主な目的として調査を実施した。その結果、遺跡は南北160m、東西100mの範囲に及ぶことが分かり、また縄文時代晩期の遺物の出土を見るとともに配石遺構等が確認された（瀧谷：1980）。

今回の調査は圃場整備事業に伴う排水路が本遺跡内に設けられることになり、その排水路部分について実施したものである。その位置は遺跡全体のほぼ中央からやや北寄りにあたる。

### (1) 調査地区的設定

排水路は本遺跡のほぼ中央を南東から北西方向に設けられるものと、それに直交し北東方向に設けられるものがある。そこで、南東から北西方向に設けられる排水路の中心線と、それに直交し北東方向に設けられる排水路の中心線を軸線として対象地区全体に3m単位でグリッドを組んだ。グリッド名は南東—北西軸をアラビア数字、南西—北東軸をアルファベットで表わした。また、調査地区を便宜上4区に分け、BQ・BR—100・101区を基点として北東側を北区、北西側を西区、北区と西区の直交する付近を南区、南東側を東区とした。

### (2) 調査の経過

調査は、昭和55年7月7日に開始した。調査対象面積は約960m<sup>2</sup>である。

基本層位は54年度の調査で明らかになっていた。そこで調査は重機及び手掘りで、北・西・南・東区の順に表土から第V層までの堆積層を掘り下げた。

その結果、北・東区では表土下約20~30cmで、西・南区では表土下約60~70cmで54年度に確認された第VI層を確認し、遺物の散布が認められた。また、南区で54年度に確認した配石遺構3基を第VI層上面で再確認した。

その後の調査は第VI層、配石遺構の性格及び内容把握を目的として精査を続け、さらにそれに併行して他の遺構の検出に努めた。

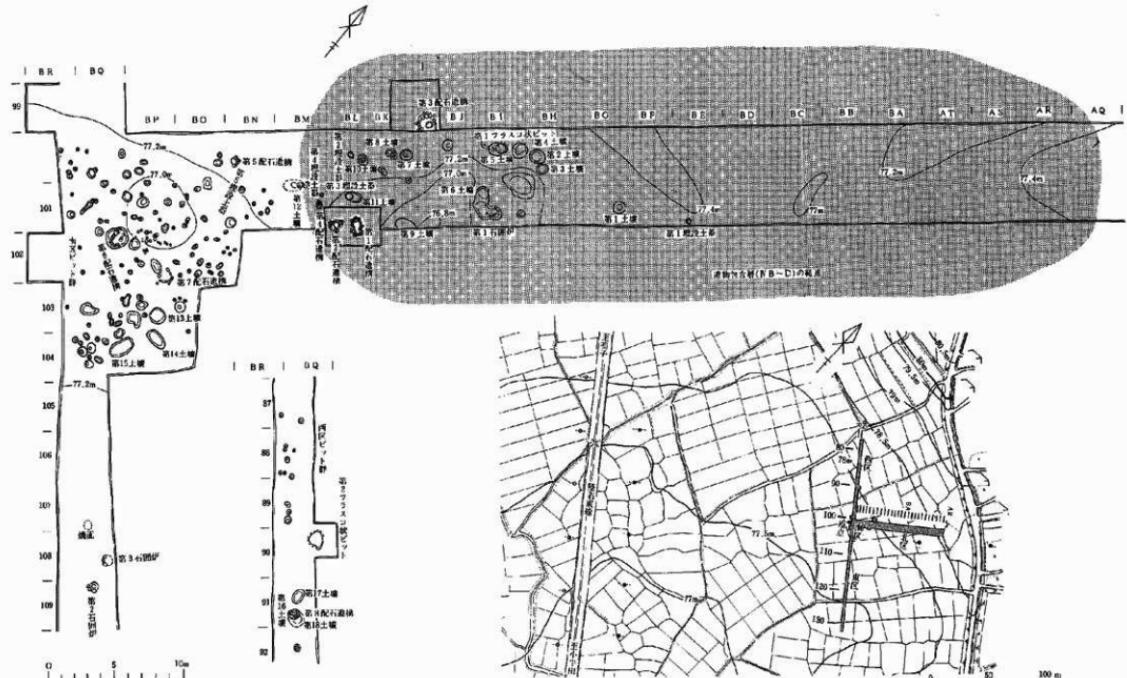
その結果、第VI層は良好な遺物包含層であることが確認され、遺構については北・南・西区で新たに配石遺構6基が発見された。さらに土壙、埋設土器、石壠炉、フラスコ状ピット、焼面、ピット群などが発見された。

また、遺物包含層からは多量の縄文土器、石製品、土製品の他に、骨角器、藍胎漆器・檣等の漆器が出土した。

10月18日には以上の調査の成果を公表するために、現地説明会を開催した。

なお、北区で検出された配石遺構3基については、排水路のやや外側に位置していることから、遺構の底面まで掘り下げたのち埋め戻しを行ない保存することにした。

調査は、12月2日をもって終了した。発掘面積は960m<sup>2</sup>である。



第3図 道標配置図・グリッド配置図

### III 調査の成果

#### 1 遺物包含層（第4～6図）

今回の調査で確認された基本的な層位は、大別して8層である。第Ⅰ層から第V層については、54年度の調査で明らかにされている。すなわち、第Ⅰ層は表土で厚さ20～30cmを計る。第Ⅱ層から第V層は北区の北・南端、西区、南区、東区の一部に分布し、西から東に緩やかに傾斜している。第VI層は遺物包含層である。第VII層は、北・西区に分布し北区では北から南に傾斜し、西区では西から東に緩やかに傾斜している。遺物を僅かに含み、出土遺物などから大洞B式かそれ以前に形成されたものと考えられる。第VIII層は地山である。

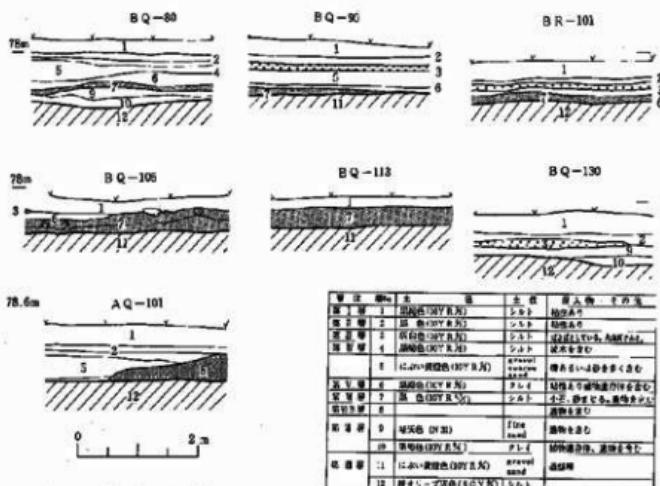
遺物包含層（第VI層）は第VIA～VID層の4層に大別された。

第VIA層は北区の中央部以南、西、南、東区において分布し、厚さ5～50cmある。わずかに南に傾斜する。遺物が層理面に対して不規則に傾斜していること、また縄文時代晚期大洞BC～A'式に属する遺物が混在して出土していることから2次堆積したものと思われる。ただし、層上面で大洞A'式期と考えられる配石遺構、埋設土器、土壌が確認されていることや出土遺物の所属時期からみて、層の堆積時期は大洞A'式かそれに近い時期と考えられる。

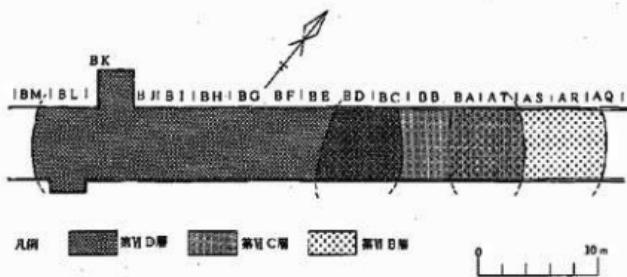
第VIB層は北区の北端に分布し、厚さは約70cmある。BE-100・101区で第VIC層直上に形成され、北に急傾斜する。層は10数枚に細別される。遺物は第VIB層最下層で一括及び完形土器が多いが、その他の層ではあまり出土しなかった。同層出土の土器は、細別された層でみると上部の層では大洞A'式、下部の層では大洞A式に属するものであり、本来第VIB層は2つに大別されるものと考えられるが、発掘時にそれを明確にできなかった。土器以外に石製品、土製品、漆器などが出土している。

第VIC層は北区の北側から中央部に分布し、厚さは約50cmある。BE-100・101区の北側で第VID層直上に形成され、北に急傾斜する。層は10数枚～20枚に細別可能である。遺物は層理面に沿って出土し、一括及び完形土器が多量に出土している。これらの土器は大洞C<sub>2</sub>式に属するものである。その他に石製品、土製品、漆器などが出土している。

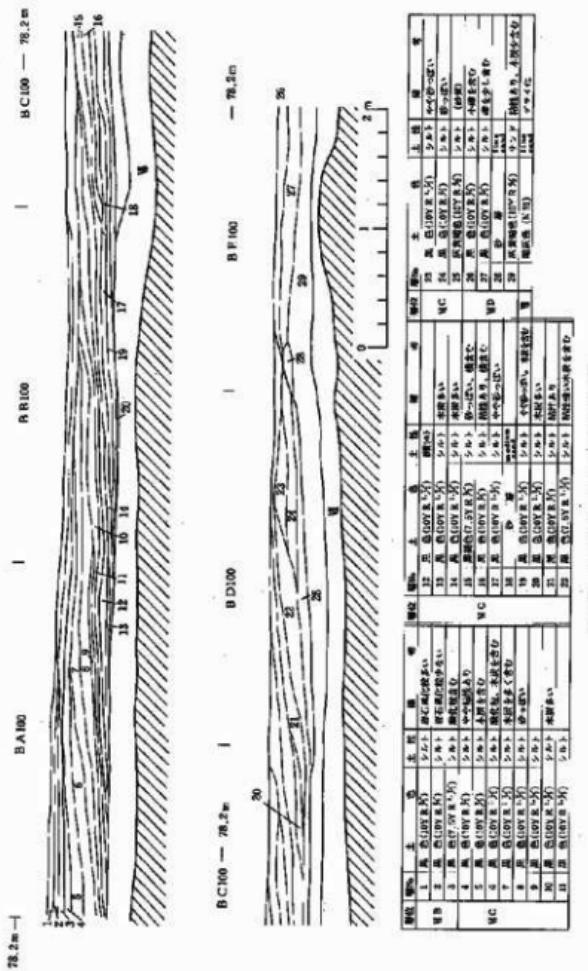
第VID層は北区の中央部に分布し、厚さは約40cmある。中央東側が最も高く、周辺に向かってゆるやかに傾斜し、縁辺では傾斜が急になる。層は5～6枚に細別される。遺物は層理面に対し規則正しい傾斜をもち、一括及び完形土器が多量に出土している。これらの土器は大洞C<sub>1</sub>式に属するものである。



第4図 基本層位



第5図 造物包含層の分布



第6图 BA100~BC100区域断面图

## 2 発見された遺構

調査の結果、配石遺構・土壤・埋設土器・石閉炉・フラスコ状ピット・焼面・ピット群が検出された。ここでは、配石遺構・土壤・埋設土器・石閉炉について述べることにする。

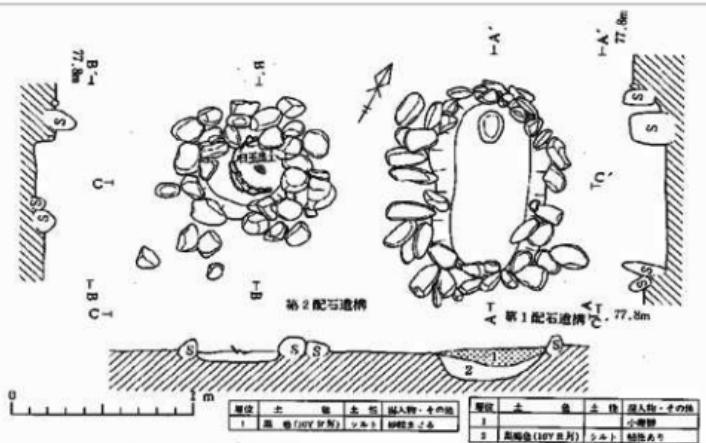
### (1) 配石遺構

配石遺構は北区で5基、南区で2基、西区で1基の合計8基が認められた。なお、南区の配石遺構は54年度に3基確認しているが、調査の結果、配石遺構として認められるのは2基であることが判明した。

#### 第1配石遺構

確認面：B L-101～102区に位置し、第VIA層上面で確認された。

規模・構造：土壤の周縁・内壁に配石を伴うものである。土壤の平面形は梢円形を呈し、長軸約1.1×短軸0.6mの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは20cmを計る。底面は平坦である。配石には河原石が用いられ、その大きさは10～25cmのものが多い。これらは土壤周縁約30cmの範囲に配され、土壤の長軸に対して平行な周縁では、河原石を長軸に直交するような向きで据えており、その短軸に対して平行な周縁及び内壁では、壁に立てかけている。さらに、土壤長軸の北西壁手前に人頭大の河原石を立てている。土壤内堆積土は2層認められ、第1層は小穢層であり土壤の中央に向かうにつれ厚く堆積している。これは遺構周辺には認められず、しかも、小穢のみであることから土壤の上部構造であった可能性が強い。遺構に伴うと考えられる遺物としては、堆積土から出土した朱塗りの土製小玉が1点ある。



第7図 第1・第2配石遺構

## 第2配石遺構

確認面：B L—101～102 区に位置し、第1配石遺構から西へ約30 cmの距離にある。第VIA層上面で確認された。

規模・構造：土壌の周縁・内壁に配石を伴うものである。土壌の平面形は円形を呈し、径0.5 mの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは8 cmある。底面はほぼ平坦である。配石には河原石が用いられ、その大きさは約10～20 cmのものが多い。これらは土壌周縁約60 cmの範囲内にあり、土壌の平面形に沿って円形に密に配されている。また、土壌中央の底面から約8 cm上位から土器が検出されている。土器は逆位の状態で検出され、口縁部の約1/2が残存している。土壌内堆積土は1層認められる。遺構に伴うと考えられる遺物としては、底面から出土した白玉が9点ある。

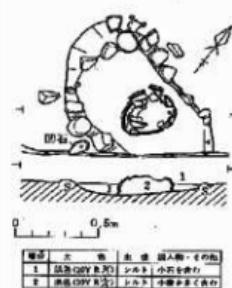
## 第3配石遺構

確認面：B J・B K—99・100 区に位置し、第VIA層上面で確認された。

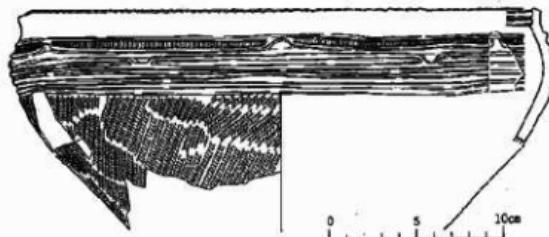
規模・構造：土壌の周縁・内壁に配石を伴うものである。土壌の平面形は梢円形を呈すると思われるが、排水及び層観察のために設けたトレーナーのために、東端は削平されている。そのため、長軸は不明だが短軸は60 cmを計る。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約10 cmある。底面は平坦である。配石には河原石が用いられ、その大きさは10～20 cmのものが多い。土壌周縁には約10 cmの範囲内にまばらに配され、土壌内壁には寄りかけて密にみられる。

土壌内堆積土は1層認められる。

土壌のほぼ中央の位置に土器を配置している。土器は土壌の底面に接して逆位の状態で検出された。土器内埋土は1層認められ、小砾を多く含んでいる。土器（第9図）は底部を欠損し



第8図 第3配石遺構



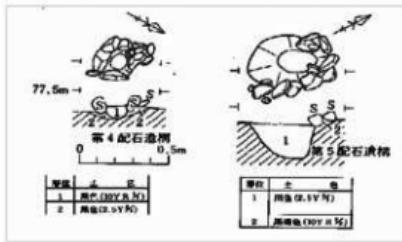
第9図 第3配石遺構に伴う土器

ている。体部は外傾し、肩部で内湾しながら直立する頸部に至り、口縁部が外反する大形の浅鉢形土器である。口縁部上端には等間隔に刻目が施されている。口頸部の外面は研磨され、口縁部の内側には2条の平行沈線が施されている。文様が集中して施される肩部には、π字状文および刺突が交互に、さらにπ字状文下に3条の平行沈線文が施されている。体部には斜行縄文(LR)が横位に施されている。所属時期は文様の特徴から大洞A'式と考えられる。

#### 第4配石遺構

確認面：BM-101区の東側に位置し、第VII層上面で確認された。

規模・構造：土壌の周縁に配石を伴うものである。土壌の平面形は不整の円形を呈し、径約15cmの規模である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約5cmある。配石は河原石が用いられ、10~20cmの石を主に用い、それらの間をうめるように5~8cmの小石が配されている。これらは土壌周縁約10cmの範囲に円形に配されている。配石下に掘り方が認められる。土壌内堆積土は1層認められる。



#### 第5配石遺構

確認面：BM-100区の南側に位置し、地山上面で確認された。

規模・構造：土壌の周縁に配石を伴うものである。土壌の平面形は梢円形を呈し、長軸約45×短軸35cmの規模である。壁は南側がなだらかに立ち上がり、北側ではほぼ垂直に立ち上がる。深さは約25cmである。配石には河原石が用いられ、10~15cmのものが多い。これらは土壌の北側から東側にのみ認められ、壁に沿って梢円形に配されている。土壌内堆積土は1層認められる。

#### 第6配石遺構

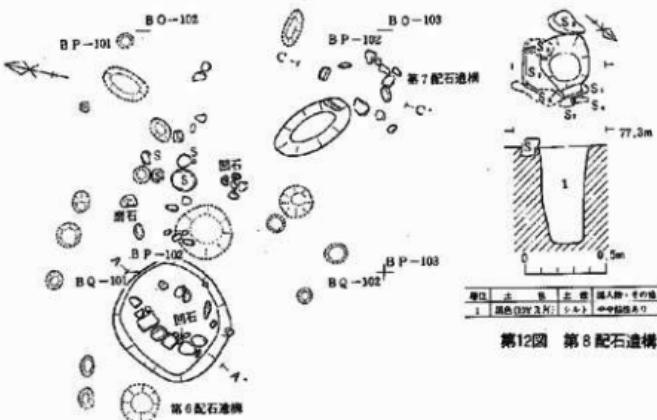
確認面：BQ-101・102区の位置にあり、第VIa層上面で確認された。

規模・構造：土壌上面に配石を伴うものである。土壌の平面形はほぼ円形を呈し、径約1.4mの規模である。壁は急傾斜で立ち上がり、深さは30cmを計る。配石には河原石が用いられ、10~20cmのものが多い。これらは角ばっているのもあるが、多くは扁平なものを用い、土壌堆積土上面の土壌の輪郭より内側に梢円形に配されている。

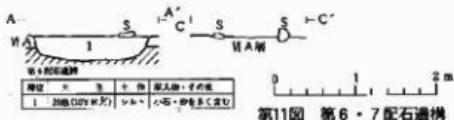
#### 第7配石遺構

確認面：BP-102・103区に位置し、第VIa層上面で確認された。

規模・構造：土壌の端に接して配石を伴うものである。土壌の平面形は梢円形を呈し長軸約1×短軸0.6mの規模である。壁は急に立ち上がり、深さは20cmを計る。底面は平坦である。



第12図 第8配石造構



第11図 第6・7配石造構

これらは据えただけのものと直立した状態で配されるものがある。土壌内堆積土は1層認められる。配石には約20cmの大きさの河原石が用いられ、土壌上面東端から外側に円形に配されている。

### 第8配石造構

確認面：BQ-91区の南側に位置し、地山上面で確認された。

重複：第18土壌を切っている。

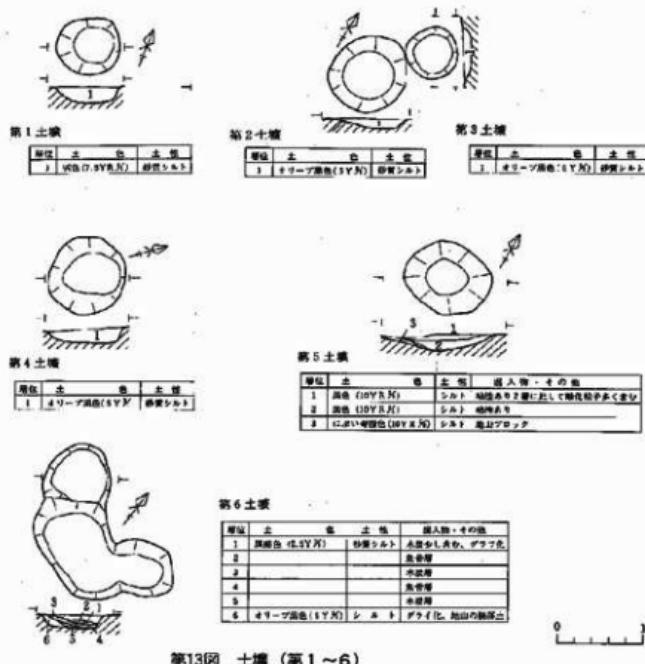
規模・構造：土壌の周縁に配石を伴うものである。土壌の平面形は円形を呈し、径約30cmの規模である。壁は垂直に立ち上がり、深さは60cmを計る。底面は平坦である。配石には河原石が用いられ、土壌の周縁約10cmの範囲に「コ」の字形に配されている。河原石S<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>・S<sub>3</sub>は同一の石で、打ち欠いて3つに分けたと考えられる。土壌内堆積土は1層認められる。

## (2) 土壙

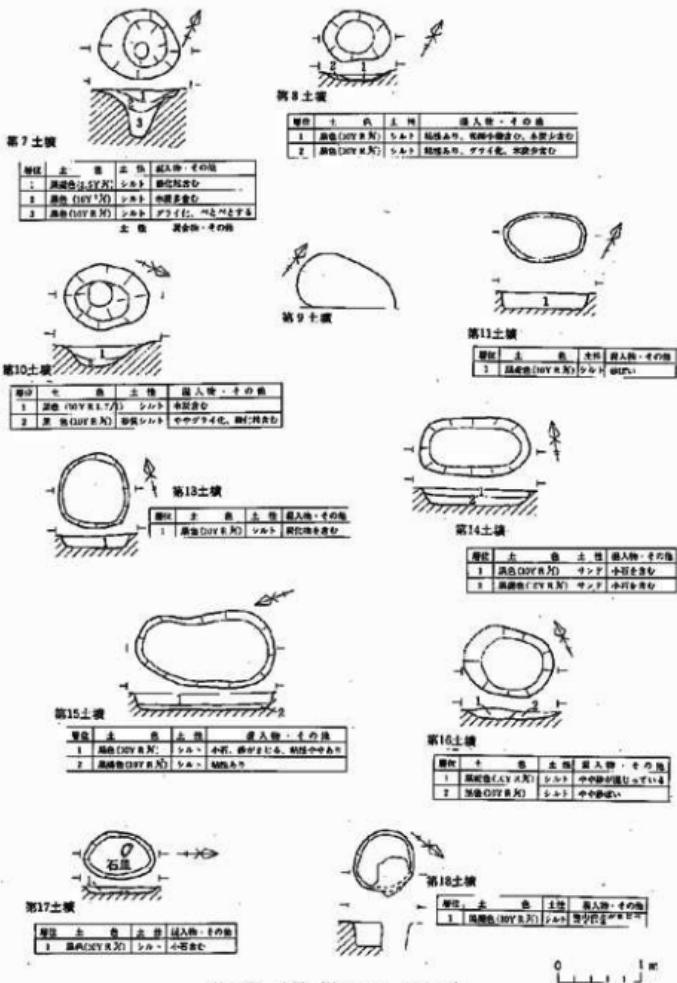
土壙は、北区 (B F～BM—100・101区) で 12 基、南区 (B P—104, B Q—101～104区) で 3 基、西区 (B Q—91 区) で 3 基の計 18 基検出された。ここでは、その平面形・規模・構造・出土遺物全般について概要を述べることにし、個々の土壙については第 1 表にまとめるこ<sup>ト</sup>にする。

平面形：円形、不整の円形、梢円形があり、特に梢円形が多い。

規模・構造：円形では最大径が 0.9m、最小径が 0.5m、梢円形では長軸の最大が 1.7m、最小が 0.8m、短軸の最大が 0.9m、最小が 0.6m の規模である。壁の立ち上がりは殆んどが緩やかであるが、中には急なものもあり、底面は平坦なものが多い。深さは 10～60 cm の範囲内におさまる。堆積土は 1 層のみ認められるものが多いが、中には 2・3・6 層認められるものもある。



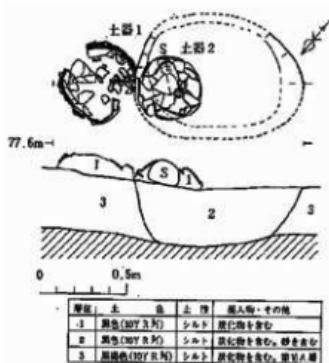
第13図 土壙 (第 1 ~ 6)



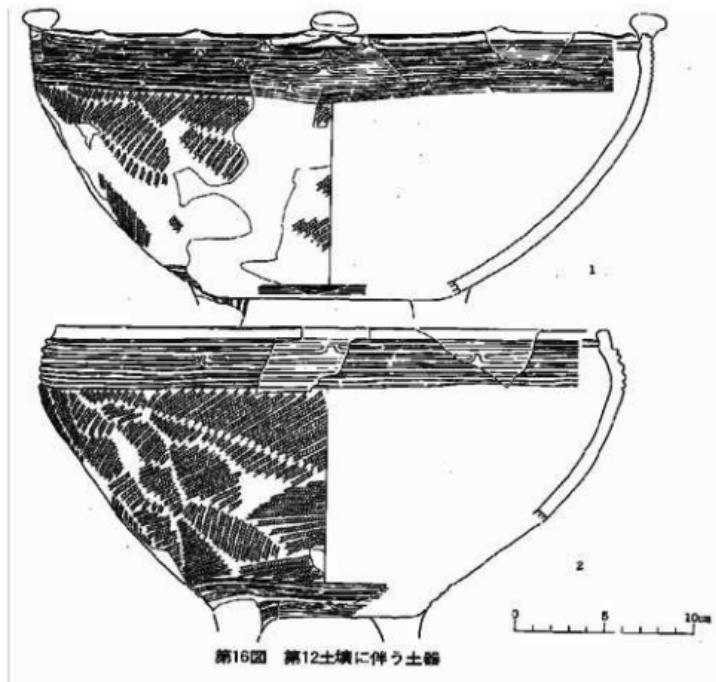
第14図 土壤 [第7~11, 13~18]

る。これらの大部分は堆積土の状況から、人為的に埋められたものと思われる。遺構に伴うと考えられる遺物としては、第10土壤の堆積土から有孔石製品2点、第12土壤の堆積土から白玉15点、土製の小玉2点、第17土壤底面から石皿1点がある。

なお、第12土壤ではその堆積土上面及び土壤に接する外側に、2個の浅鉢形土器が検出された。土器は逆位の状態で確認され、土器2の内側には径約20cmの河原石が置かれていた。土器1(第16図)は4つの脚を持つもので、底部を欠損して



第15図 第12土壤



第16図 第12土壤に伴う土器

いる。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部が直立する大形の浅鉢形土器である。口縁端部には、頂部が円盤状を呈する突起が4つ等間隔に付き、さらにそれらの突起間に山形状小突起が二つずつ配置されている。口縁部外面には、円盤状突起下に彫去による三角状の文様が、その下にπ字状文が施されている。口縁部内面端部には、一条の沈線が施されている。体部下端から底部には平行沈線による文様が施され、その延長が脚にまで及んでいる。なお、口縁部内外および体部下端の沈線に丹塗の痕跡が認められる。土器2(第16図2)は4つの脚をもつもので、底部を欠損している。体部は外傾しながら立ち上がり、肩部でふくらみ、口縁部が内弯する大形の浅鉢形土器である。口縁部外面は研磨され、その内面には一条の沈線が施されている肩部には平行沈線及びπ字状文が施されている。体部下端から底部にはπ字状文が施され、その延長が脚にまで及んでいる。なお、口縁部内面の沈線及び肩部の平行沈線に丹塗の痕跡が認められる。所属時期は文様の特徴からともに大洞A'式と考えられる。

制御方式	種類	機器名	半径 (m)	走行時間	運転方法	操作員	モード
北 国 境	1	車両 - 150	内 田	約0.7	走行 + 上昇	平野	1号
	2	車両 - 150	内 田	約0.6	走行 + 下降	平野	1号
	3	車両 - 150	内 田	約0.9	走行 + 中	平野	1号
	4	車両 - 150	内 田	約0.5	走行 + 下降	平野	1号
	5	車両 - 150	内 田	各車1.3 x 走行時間	走行 + 中	森川	2号
	6	車両 - 150	内 田	約0.8	走行	平野	4号
	7	車両 - 150	内 田	約1	走行 + 中	平野	2号
	8	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	2号
	9	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 上昇	平野	1号
	10	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 下降	平野	1号
本 区	11	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
	12	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
	13	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
	14	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
	15	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
国 境	16	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	2号
	17	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号
	18	車両 - 150	内 田	約0.6 x 走行時間	走行 + 中	平野	1号

第1表 土 塘

### (3) 埋設土器

埋設土器は北区にのみ分布し、計5基検出されている。

## 第1埋設土器

B L-101 区の南側に位置し、地山上面で確認された。土器は正位の状態で検出され、土器よりやや大きい掘り方が認められた。土器の周辺には、 $7 \times 10$  cm の大きさの河原石および石のぬき取り痕と思われるくぼみがある。堆積土は3層認められ、第2層中には焼土が、第3層中には多くの炭化物が含まれている。

土器(第18図1)は口縁部を欠損している。体部下端で直立し、体部下半から体部上半にかけて外傾する深鉢形土器である。体部外面は無文である。

## 第2埋設土器

B L-100 区の中央に位置し、第VID層中で確認された。土器は正位の状態で検出され、土器よりやや大きい掘り方が認められた。土器の底部は、掘り方の底面に接している。堆積土は2層認められた。第2層は焼土であるが、第1・2層とも木炭が僅かに含まれている。

土器(第18図2)は口縁部を欠損している。体部が外傾しながら立ち上がる深鉢形土器である。体部外面には結束しない羽状繩文(LR・RL)を施している。体部下端は研磨されている。

## 第3埋設土器

B L-101 区の北側に位置し地山上面で確認された。第11土壤の西側を切っている。土器は正位の状態で検出され、土器よりやや大きい掘り方が認められた。堆積土は3層認められ、北側に傾斜しながら堆積している。第3層には骨片、木炭が少量含まれている。

土器(第19図3)は口縁部を欠損している。体部下半から体部中央にかけて外傾しながら立ち上がり、体部上半でやや内傾する深鉢形土器である。体部外面には結束しない羽状繩文(LR・RL)を施している。また、綾格文が認められるが、これは繩文原体LR、RLの末端にRの紐を右巻きにして2回巻きつけて結わえたため、原体を回転させた時に羽状繩文と同時に施されたものである。体部下端は研磨されている。

## 第4埋設土器

B M-101 区の北側に位置し、第VII層上面で確認された。土器は第VID層を掘りこんで埋設されたと思われる、正位の状態で検出された。掘り方は土器よりやや大きい。堆積土は2層認められ水平に堆積している。第2層には骨粉が僅かに含まれる。

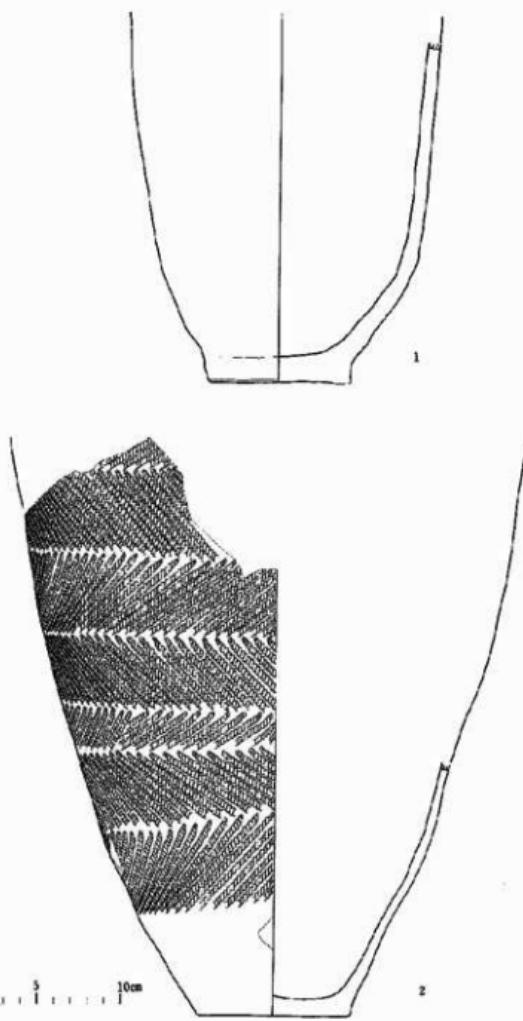
土器は口縁部を一部欠損している。体部下半から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり、口縁部が内弯する深鉢形土器である。所属時期は大洞C<sub>1</sub>式と思われる。

## 第5埋設土器

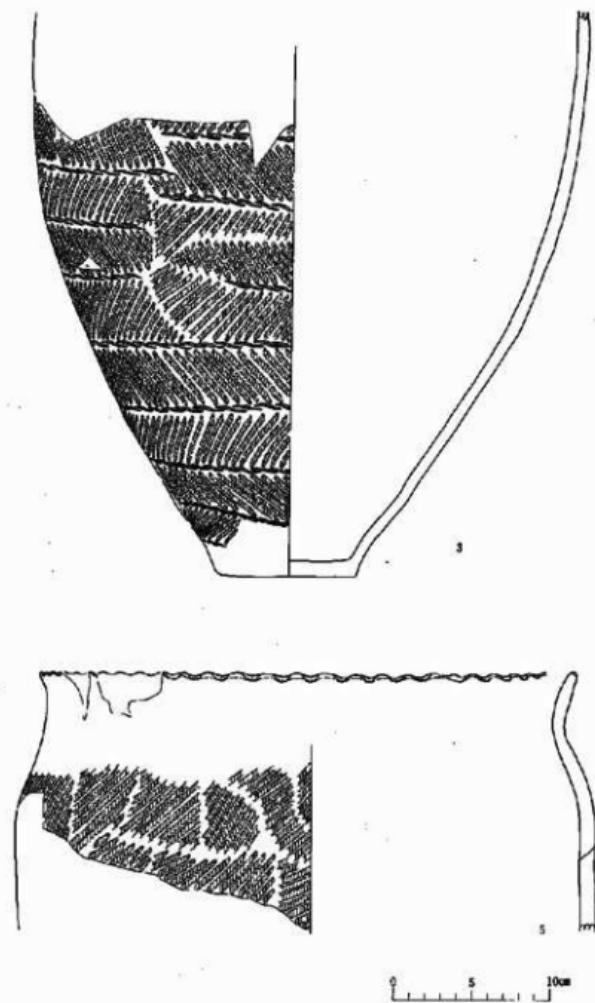
B N-101 区の西側に位置し、第VI層上面で確認された。土器は逆位の状態で検出された。掘り方は地山上面で認められた。また、土器頸部の位置に別個体の土器片が敷きつめるような状



第17図 第1～5埋設土器



第18図 第1・2埋設土器



第19図 第3・5埋設土器

態で検出された。堆積土は土器頸部を境に2層に分かれれる。

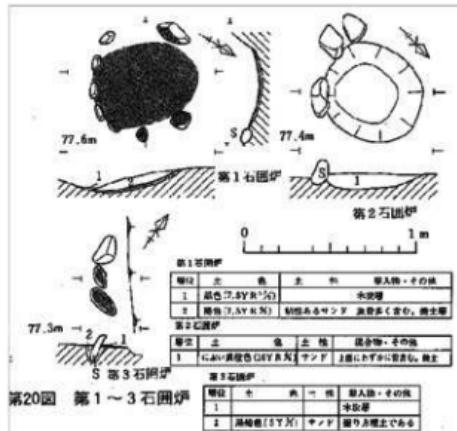
土器(第19図5)は体部下半から底部を欠損している。体部上半がほぼ直線的に立ち上がり、口頸部が「く」の字状に外反する深鉢形土器である。口縁端部は小波状を呈している。口縁部から頸部にかけて研磨され、体部上半には斜行縦文(LR)が横位に施されている。

#### (4) 石圓炉

石圓炉は北区で1基、東区で2基の計3期検出されている。

##### 第1石圓炉

B I-101区の南側に位置し、第VII層上面で確認された。平面形は円形を呈し、径約60cmの規模である。石は9個あり、火熱を受けて石の内側が赤変しているものもある。堆積土は2層認められ、第1層には木炭が多量に含まれ、第2層は魚骨を多量に含む焼土である。掘り方は不明である。



第20図 第1～3石圓炉

##### 第2石圓炉

B Q-109区の西側に位置し、地山上面で確認された。平面形は円形を呈し、径約70cmの規模である。石は3個残存している。堆積土は1層認められ、焼土である。焼土上面には、僅かに骨が含まれている。掘り方は認められない。

##### 第3石圓炉

B Q-108区の中央に位置し、地山上面で確認された。残存部が西側の半分しかがないが、平面形は円形を呈し、径約50cmの規模と思われる。石は3個残存しているが、そのうち2個は、火熱を受けて赤変している。堆積土は1層認められ、木炭が薄く堆積している。掘り方は石にのみ認められる。

### (5) 遺構について

ここでは性格の明らかにされていない配石遺構・土壙・埋設土器について、その所属時期・規模・構造・出土遺物・分布などの特徴及び共通点をまとめ、考察を加えることとする。所属時期は次の通りである。

(配石遺構) 確認面から、第1・2・6・7配石遺構は大洞A'式期かそれに近い時期、第4配石遺構は大洞C<sub>1</sub>式期かそれ以前の時期、第8配石遺構は大洞A'式期かそれ以前の時期と考えられる。第3配石遺構は遺構に伴う土器から、大洞A'式期である。

(土壙) 確認面から、第1~4・6・9・11土壙は大洞C<sub>1</sub>式期かそれ以前の時期、第5・7・8・10土壙は大洞C<sub>1</sub>式期、第13~18土壙は大洞A'式期かそれ以前の時期と考えられる。第12土壙は遺構に伴う土器から大洞A'式期である。

(埋設土器) 確認面から、第1~3埋設土器は大洞C<sub>1</sub>式かそれ以前の時期、第5埋設土器は大洞A'式期かそれに近い時期と考えられる。第4埋設土器は大洞C<sub>1</sub>式期である。

規模・構造などの特徴とまとめると次のようになる。

(配石遺構) 土壙の平面形には梢円形・円形・不整の円形があり、最大規模で径1.4m、最小規模で径15cmである。構造は配石の配置状況から4つのタイプに分けられる。すなわち、①土壙堆積土上面内側に配石を伴うもの、②土壙の周縁にのみ配石を伴うもの、③土壙の周縁及び内壁に配石を伴うもの、④土壙堆積土上面の長軸端に接して配石を伴うものがある。③の中には土壙内に土器を伴うものがある。これは逆位の状態で検出され、しかも土壙底面に接して出土していることや堆積土の状況などから土器棺としての可能性が考えられる。また、上部構造として小礫があったと考えられるものがある。土壙内堆積土はいずれも人為的な堆積状況を示す。遺構に伴うと考えられる遺物として、第1配石遺構では土製の小玉1点、第2配石遺構では土器1個体及び白玉9点、第3配石遺構では土器1個体がある。



第21図 配石遺構・埋設土器・土壙の分布

(土壤) 平面形には梢円形・円形・不整の円形があり、最大規模で長軸1.7×短軸0.9m、最小規模で径0.5mである。壁は緩やかに立ち上がるものと急に立ち上がるものが半々ある。深さは最大で60cm、最小で8cmで、底面は平坦なものが多い。土壇内堆積土は人為的堆積状況を示すものが大半である。遺構に伴うと考えられる遺物として、第12土壇では土器2個体及び白玉15点、土製の小玉2点、第10土壇では有孔石製品2点がある。

(埋設土器) 正位の状態で検出されたものが多く、大形の深鉢形土器を用いている。中には逆位の状態で検出されたものもある。土器内堆積土は2~3層認められ、骨粉・骨片・木炭・焼土などが含まれている。木炭や焼土が含まれているものは、炉としての性格が考えられる。

#### 分布

配石意向は北区の南側及び南区に、土壇は北区の中央部から南端及び南区、西区の東側に、埋設土器は北区の南側に集まる傾向がみられる。したがって、全体の傾向としてはこれらの遺構は、北区の中央部から南区にかけて集中してみられると言える。また、時期的には大洞C<sub>1</sub>式前後の遺構が北区の中央部から南側にかけて半円形状に配され、大洞A'式前後の遺構は北区の南側から南端に認められたり、南区に半円形状に配される傾向が窺われる。

以上のように遺構の分布にある程度の規則性が認められ、しかも時期毎に分布に違いが認められること、炉としての性格が考えられる埋設土器以外のものは土器植墓としての性格が考えられること、配石遺構や土壇に伴うと考えられる遺物として土器・白玉・小玉・有孔石製品などがあり、これらは副葬品と考えられることなどから、配石遺構・土壇・埋設土器の大部分は墓としての性格が考えられる。したがって、北区の中央部から南区にかけて墓域を構成していた可能性が窺われる。また、良好な遺物包含層が北区に、墓域が北区から南区にある程度分布していることから、居住域の存在が予想される。居住域は調査区の北側と推定される。

なお、土器植墓の類例として梨ノ木塚遺跡（増田町教委：1979）に多くみられ、土壇に副葬品を伴う類例として湯出野遺跡（秋田県教委：1978）、源常平遺跡（青森県教委：1977）にみられる。

### 3 出土遺物

出土遺物は平箱で約500箱に及ぶため、整理は未だ不十分である。そのため、ここで紹介する遺物は、ほんの一部であることをあらかじめ断つておくことにする。

#### 縄文土器

第VID層出土土器（図版16～17）

深鉢形土器（1・2）、浅鉢形土器（3～6）、壺形土器（7～9・14・15）、皿形土器（10・11）、注口土器（12・13）、台付鉢（16）などの形態がある。

深鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内弯する小形の深鉢形土器である（1・2）。1は口縁端部に2個1対の突起を有し、その下に1条の刻目帯及び平行沈線が施されている。2は波状口縁を呈し、口縁部に1条の刻目帯と平行沈線が施されている。

浅鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内弯するもの（3・5）、口頸部が「く」の字形を呈するもの（4）、肩部で内弯しながら、口頸部が「く」の字状に外反するもの（6）がある。6は口縁端部に丸味をもつ。3・5は口縁部にのみ文様が認められ、平行沈線や刻目が施されている。4は口縁部から肩部にかけて文様が認められ、口縁部には1条の刻目帯、平行沈線が、肩部には、左傾する羊齒状文が施されている。

壺形土器 体部が球形状にふくらみながら、直立もしくは内傾する頸部に至るもの（7・8・14・15）、徳利形を呈するもの（9）があり、口縁部は外反する。なお7は細長い頸部をもち、口縁部は強く外反する。9は体部全体に磨り消し縄文によるX字状の文様が二段に分けて施されている。

皿形土器 体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（10）、体部下端で直立し、体部下半から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（11）がある。11は丸底を呈している。10・11ともに器外面全体に文様が施されているが、11には体部に磨り消し縄文による大腿骨文が施されている。

注口土器 体部がソロバン玉状をなし、口頸部が「く」の字状を呈するもの（12）、丸底で肩部が内側に緩やかな屈曲をもつて頸部に至るもの（13）があり、口縁部は外反する。

台付鉢 体部下端から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり、直立する口縁部に至る器形である（16）。

以上の土器の所属時期は、1～3、5～16が文様表出技法や器形の特徴、土器の共伴関係から縄文時代晩期大洞C<sub>1</sub>式に属すると思われる。4は大洞B C式に属すると思われる。

第VIC層出土土器（図版18～20）

深鉢形土器（17・18・31）、浅鉢形土器（19・20・25～28）、壺形土器（21～23・32～34）、注

口土器 (24・29), 台付鉢 (30) などの形態がある。

深鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり, 肩部から口縁部が「L」字形を呈し, 口縁部が外反するもの (17), 口頸部が「く」の字形を呈すもの (18), 口縁部が直立するもの (31) がある。17は肩部に1個の突起を有し, 体部に磨り消し縄文による雲形文を施している。

浅鉢形土器 体部は外傾しながら立ち上がり, 口縁部で直立して口縁端部が外反するもの (19・27・28), 口縁部が直立するもの (20・25・26) がある。20・25~28 の口縁端部には山形状突起が等間隔に施され, 突起間には刻目が認められる。19・20・25~28 の体部には磨り消し縄文による雲形文が施されている。

壺形土器 体部は外傾しながら立ち上がり, 肩部で内弯しながら直立する口縁部に至るもの (32・33・34), 外反する口縁部に至るもの (21), 内傾する口縁部に至るもの (23) がある。口縁端部はいずれも丸味をもち外反する。また, 22・23 などは肩部から体部が球を上下から押しつぶした形を呈している。21は口縁端部に山形状の突起が1個施されている。肩部には磨り消し縄文による雲形文が施されるもの (28), 3本1組の垂線が等間隔に施され, さらに垂線間に雲形文が施されるもの (21)、刻目帯と沈線が交互に施されるもの (22) がある。

注口土器 肩部から体部がソロバン玉形を呈し, 口縁部が内傾するもの (24), 球を上下から押しつぶした形を呈し, 口縁部が外反するもの (29) がある。29は台が付いている。29は口縁端部に山形状突起を1個有し, 肩部には3本1組の垂線が等間隔に施され, さらに垂線間に雲形文が施されている。24は肩部に鉢巻状の雲形文が施されている。

台付鉢 体部下端から体部上半にかけて外傾しながら立ち上がり, 口縁部で直立あるいはやや内傾し, 口縁端部が外反するものである (30)。口縁端部には1個の山形状突起を挟んで2個1対の突起が等間隔に施されている (30)。

以上の土器の所属時期は, 文様表出技法, 器形などの特徴, 土器の共伴関係から, 縄文時代晚期大洞C<sub>2</sub>式に属すると思われる。

#### 第VIB層出土土器(図版21-35~37)

壺形土器 (35), 台付鉢 (36・37) などの形態がある。

壺形土器 体部下端で丸味をもちながら, 体部上半まで直立し, 肩部が内傾するもの (35) で, きんちやく形を呈している。肩部にはヒトデ状に隆帯が施され, さらに隆帯間に10~10数本の平行沈線が施されている。なお, 隆帯の先端は「Y」字状を呈す。

台付鉢 体部は緩やかに内弯しながら立ち上がり, 口縁部が直立するもの (36), 体部は外傾しながら立ち上がり, 口縁部で直立して口縁端部が外反するもの (37) がある。36は口縁部に工字状文が施されている。37は口縁端部に2種類の突起が交互に, しかも等間隔に施され, 肩部にはπ字状文が施されている。

以上の土器の所属時期は、36が縄文時代晚期大洞A式、35・37が大洞A'式であると思われる。

以上、遺物包含層出土土器について、述べてきたが、第VIB層は、出土土器からさらに大別しなおす必要があると思われるが、調査段階では確認できなかつたので今後の整理に待ちたい。  
石製品・土製品(図版21・22・口絵カラー3・4・6)

第VIA層～第VID層から各種の石製品・土製品が出土している。本来ならば各層ごとに取り扱うべきであるが、ここでは整理不十分なため一括して扱い、紹介のみにとどめる。

石器には、石鏃(38～45)、石匙(46～52)、石錐(53)、磨製石斧(54・55)、円盤状石製品(56・58)、石皿、凹石、磨石、独鉛石(37)などの他に、岩版(59・61)、岩偶(60)、勾玉(カラ一口絵6)、有孔石製品(62～64)、ペンダント状石製品(65)、小玉・臼玉(カラ一口絵6)、石刀・石剣・石棒などの呪術的・装飾的なものがある。

土製品には、土偶(カラ一口絵3)、土版(66)などの呪術的なものの他に、滑車形耳飾り(67)、耳栓形耳飾り・小玉(カラ一口絵4)などの装飾的なもの、スタンプ状土製品、円盤状土製品などの用途不明なものがある。

#### 骨角器

棒状の刺突具が出土している。

#### 漆器(カラ一口絵1・2・5・7)

第VIB層及び第VIC層から、藍胎漆器6点、櫛3点。形態不明な漆器1点が出土している。ここでは比較的保存状況が良好なものについて紹介することにする。

#### 第VIC層出土漆器

櫛(カラ一口絵5)欠損しているため全体の形状は不明であるが、頭部はその中央部から両脇に緩やかに反り上がり、両端では山形状を呈すと思われる。また、頭部の上方に2個の突起が形成されていると思われる。歯は痕跡から見ると、断面形は円形を呈し、径4mmを計り、1.5～2mm間隔で並んでいる。頭部の外面には赤漆が塗られている。横幅の現存長約5.5cm高さ1.5cm、幅8mmを計る。

形態不明な漆器(カラ一口絵7)半欠損している。残存部は円形を呈し径約2.6cm器厚5～6mmを計る。横断面形は端部に丸味をもち、上面では中央に向かって緩やかに傾斜し、下面では平坦である。中央脇に楕円形の貫通孔が認められる。外面には赤漆が塗られている。

#### 第VIB層出土漆器

藍胎漆器 1 (カラーポ絵 1・第22図1) 4つの脚をもつものである。体部下端から体部上半にかけ外傾しながら立ち上がり、口縁部が肥厚し、直立する浅鉢形である。内外面とも赤漆が塗られている。口径 16 cm, 器高 3.7 cm, 器厚 3 mmを計る。

藍胎漆器 2 (カラーポ絵 2, 第22図2) つぶれた状態で出土したため、全体の器形は不明である。内外面とも、黒漆を塗った後に赤漆で曲線状の文様を描いている。器厚は約 1 mmを計る。

以上漆器について説明してきた。これらの所属時期は、出土土器との共伴関係から、櫛・形態不明な漆器は、縄文時代晚期大洞C<sub>2</sub>式。藍胎漆器 1・2は、大洞A式に属すと思われる。なお、藍胎漆器、櫛は山王遺跡(伊東・芹沢・伊藤・林・工藤:1965), 亀ヶ岡遺跡(三田史学会:1959), 是川遺跡(喜田・杉山:1932)に類例があり、また、藍胎漆器で内外面ともに文様を描いているもの(大洞A式)は、山王遺跡出土例に類似する。



第22図 藍胎漆器

## IV まとめ

1. 根岸遺跡は、江合川によって形成された河岸段丘上（竹原面）に立地している。
2. 調査の結果、縄文時代晚期の遺物包含層及び配石遺構8基、土壙18基、埋設土器5基、石匁炉3基、プラスコ状ピット2基、焼面1箇所、ピット群3箇所が確認された。
3. 遺物包含層は、縄文時代晚期大洞C<sub>1</sub>、大洞C<sub>2</sub>、大洞A・A'式期の3～4期に形成されたと考えられる。
4. 配石遺構、土壙、埋設土器の多くは、遺構の分布・規模・構造・出土遺物などに共通性がみられることから、墓としての性格が考えられる。所属時期は、大洞C<sub>1</sub>式期前後、大洞A'式期前後の2期に大別でき、時期毎に分布が異なる。すなわち、前者は北区の中央部から南側に集中し、後者は北区の南側、南区に集中して分布する。このことから、北区の中央部から南区にかけて墓域を構成した可能性がある。  
なお、配石遺構は、県内で初めて確認されたもので、注目される。
5. 遺物包含層が北区に、墓域が北区から南区に及んでいることから、居住域の存在が予想される。居住域は、調査区の北側と推定される。
6. 出土遺物には、縄文土器・石製品・土製品・骨角器・漆器などがある。  
縄文土器は、大半が晩期に属するもので、完形土器、一括土器が多い。その他に、後期末に属するものがある。
7. 漆器には、藍胎漆器・櫛・形態不明な漆器などがある。漆器の出土例は県内では、石巻市沼津貝塚、一迫町山王遺跡に次ぐものである。この時期における出土例が少ないので、漆器を研究する上で貴重な資料と言える。

### 〈引用・参考文献〉

- 青森県教育委員会 1977：「源常平遺跡発掘調査報告書」
- 秋田県教育委員会 1978：「湯出野遺跡発掘調査概報」
- 伊東信雄・芹沢長介 1965：「宮城県一迫町山王遺跡」日本考古学協会発表要旨
- 伊東玄三・林謙作
- 工藤雅樹
- 伊東信雄 1965：「宮城県一迫町山王遺跡」日本考古学年報 18 日本考古学協会
- 小元久仁夫 1966：「宮城県鳴子盆地の地形発達史」地理学評論第 39 卷第 8 号 日本地理学会
- 喜田貞吉・杉山寿栄男 1932：「日本石器時代植物性遺物(図録)」刀江書院
- 佐藤信行・藤原二郎 1980：「宮城県岩出山町片岸遺跡出土の弥生式遺物について」精第 2 号  
弥生時代研究会
- 石器文化談話会 1978：「座敷乱木遺跡発掘調査報告書 I」石器文化談話会誌第 1 集
- 千葉宗久 1980：「玉造遺跡」宮城県文化財調査報告書第 68 集
- 増田町教育委員会 1979：「梨ノ木塚遺跡発掘調査概報」
- 三田史学会 1959：「亀ヶ岡遺跡—青森県亀ヶ岡低湿地遺跡の研究—」考古学民族学叢刊第 3 冊
- 宮城県教育委員会 1979：「遺跡地名表」宮城県文化財調査報告書第 46 集(修正版)
- 宮城県教育委員会 1979：「遺跡地図」宮城県文化財調査報告書第 47 集
- 濱谷正三 1980：「根岸遺跡」宮城県文化財調査報告書第 64 集

写 真 図 版

図版 1 横井遺跡の位置及び周辺の地形





遺跡の遠景（南西から）



遺跡の遠景（西から）

図版2

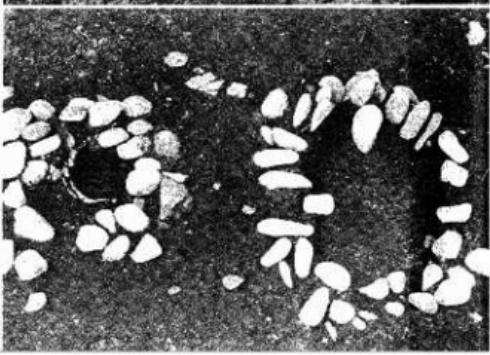
第1・2配石造橋



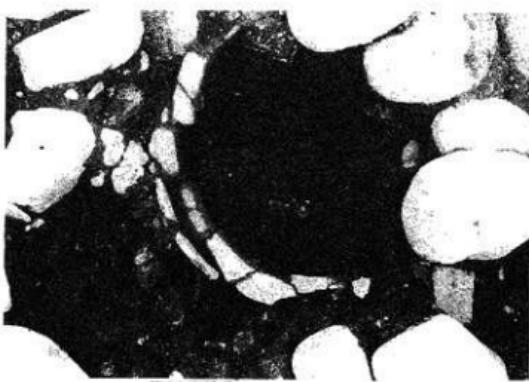
第1配石造橋



第1・2配石造橋



図版3



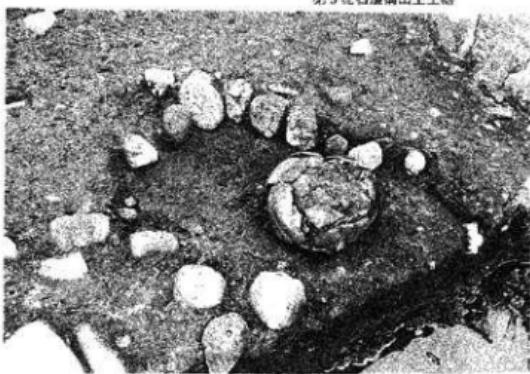
第2配石造模



第1、2配石造模白玉·小玉



第3配石造模出土土器



第3配石造模  
图版4

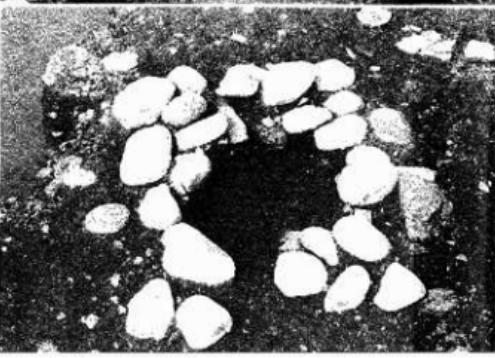
第1配石邊塊  
北東部

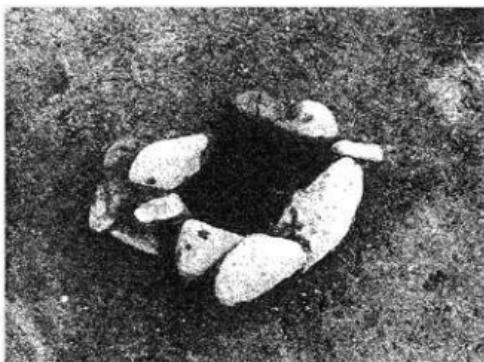


圖上  
南東部



第2配石邊塊  
積疊斜了





第4 配石道模



第5 配石道模



第6・7 配石道模

圖版6

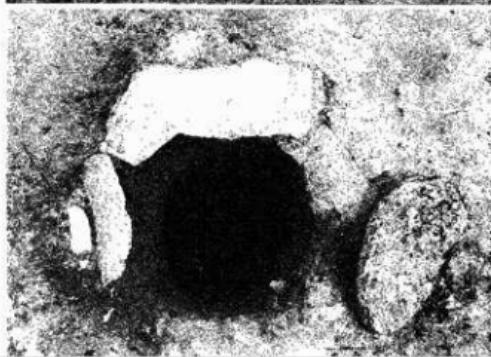
第6配石遺構



第7配石遺構



第8配石遺構



圖版7



第1 埋設土器



第2 埋設土器



第3 埋設土器

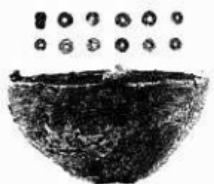


图版 8

第4埋設土器



第5埋設土器



第12土壤及出土遺物（土器・小工・白石）  
圖版9





第17土壤及び出土遺物（石皿）



第10土壤出土有孔石製品



第1石皿片



第1 フラスコ状ビット



圖版10

北区土壤・ピット群



西区ピット群

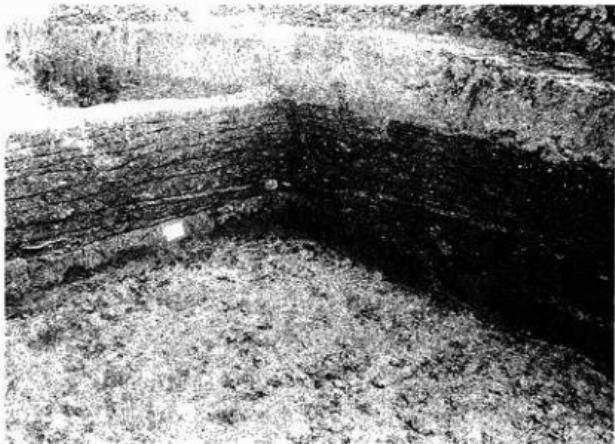


3Q-BR-95  
断面観察





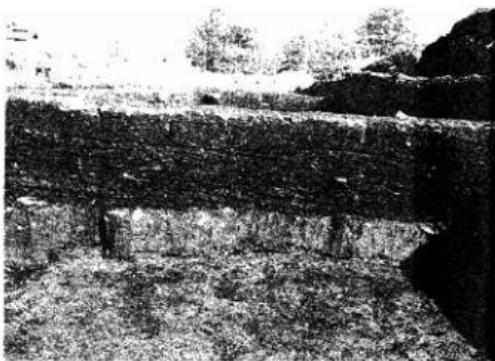
SA · AT - 101 東壁断面



AT - 101 北 · 東壁断面

圖版12

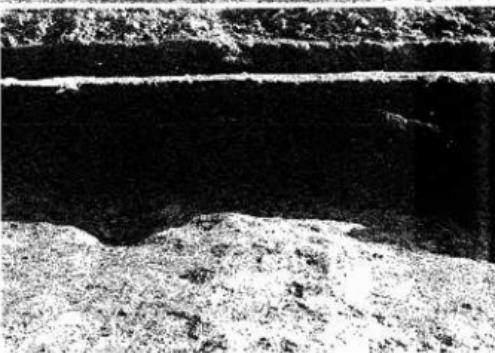
BB-101  
北壁画面



BB-HC-101  
東壁画面



BF-100  
東壁断面



图版13



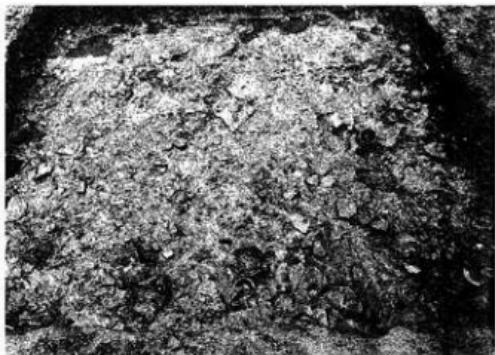
SE - 101 土器出土状况



SE - 101 土器出土状况 (细部)

图版14

BH-101  
土器出土状況



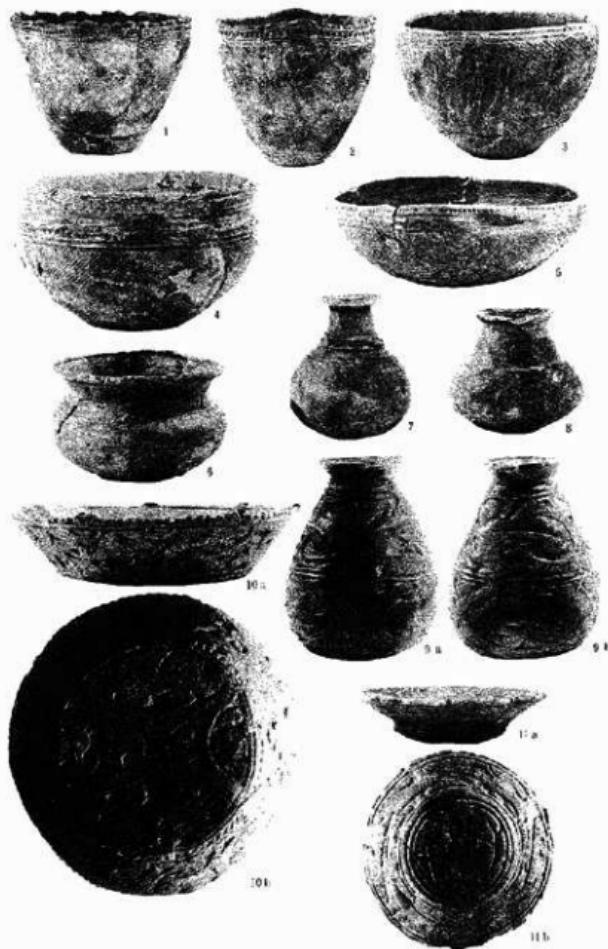
同上細部



允振調查員、作業員



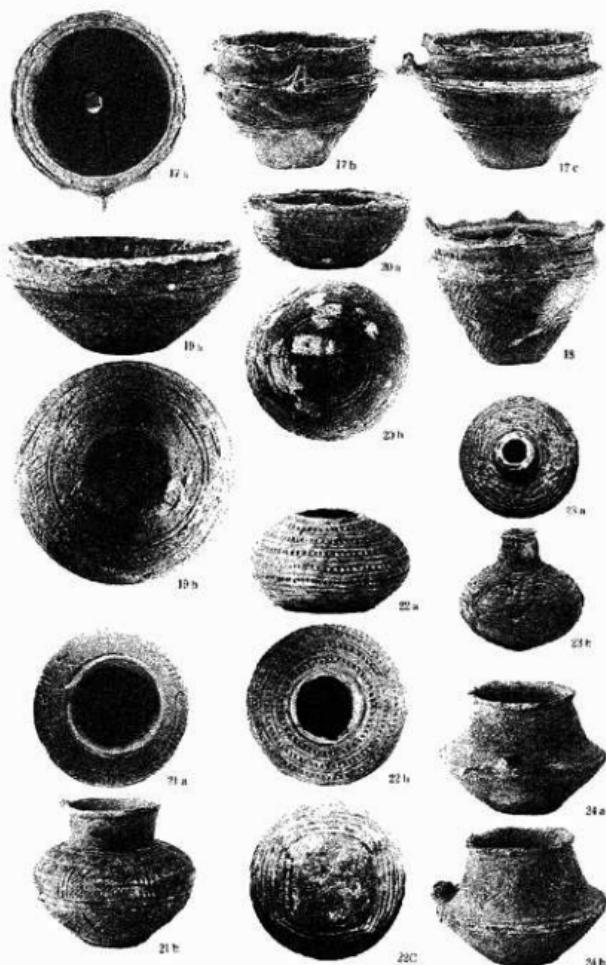
団体15



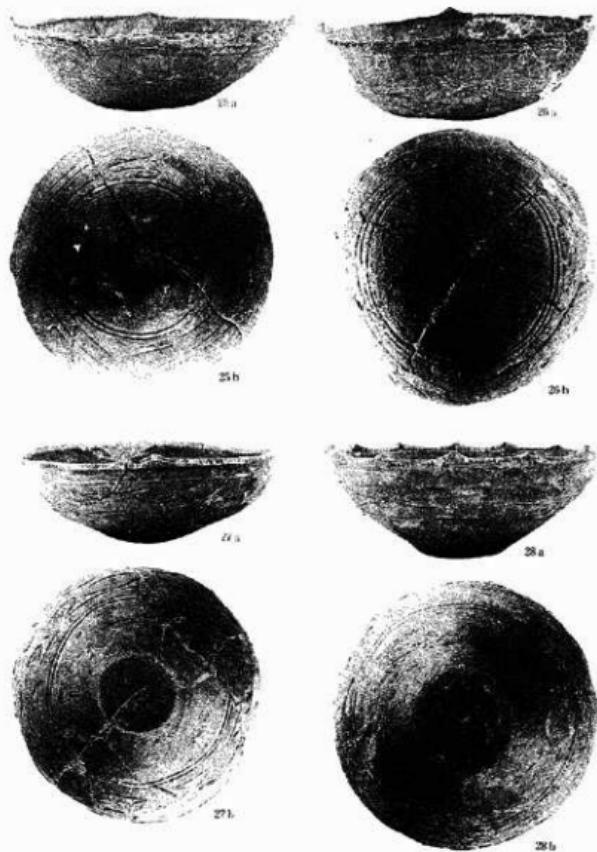
圖版16 第VI D層出土土器



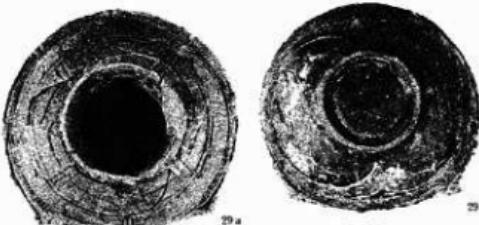
圖版17 第10D層出土十件



圖版18 第VIC層出土上部



圖版19 第四〇層出土土器



29a

29b



29c

29d



30

31

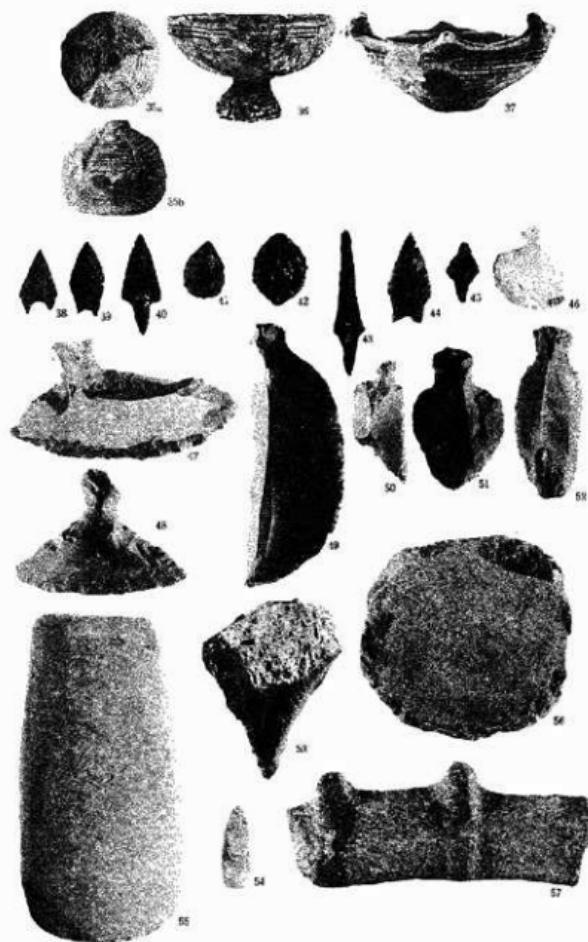
32



33

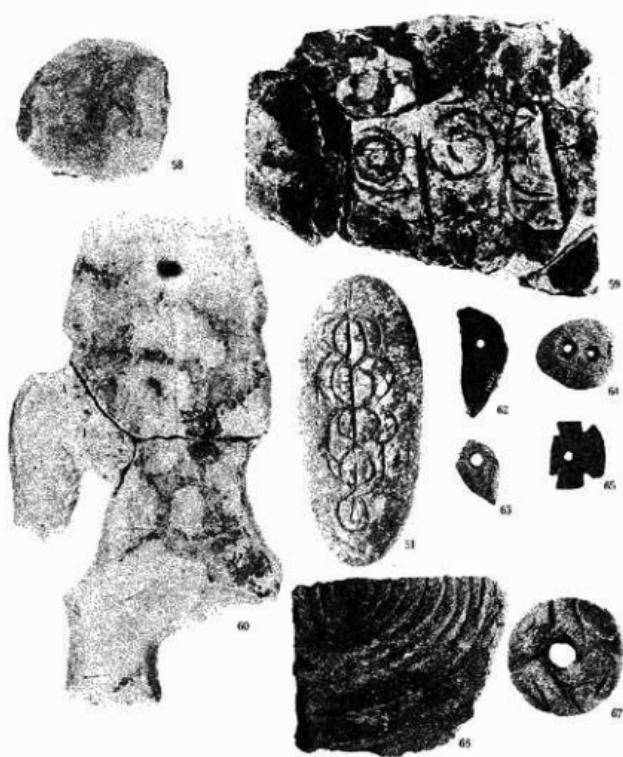
34

図版20 第VI-C層出土器



圖版21 莹窟B層出土土器・包含層出土石製品

55



圖版22 包含層出土石製品・土製品

## II 色 しか 麻 ま 古 墳 群

### 調査要項

遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町四釜

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育委員会文化財保護課

調査員：阿部 恵 太田昭夫

調査期間：昭和 55 年 5 月 12~17 日

調査対象面積：約 2100 m<sup>2</sup>

発掘面積：約 126 m<sup>2</sup>

登録番号：宮城県遺跡地名表登録番号

調査協力機関：宮城県農政部古川土地改良事務所

色麻町教育委員会・色麻土地改良区

## I 位置と環境

今回確認調査の対象となった色麻古墳群上郷支群No.7は加美郡色麻町四釜字地蔵堂2番地に田中後遺跡は四釜字田中後に所在する。両遺跡とも色麻町の中心地で、県道岩出山、吉岡線に沿って南北に細長くのびている四釜の町並の西方約500mに位置しており、現状は水田となっている。

色麻町の地形を概観すると、町西部には奥羽脊梁山脈を構成する船形火山地と、それから派生する大・小起伏丘陵地の加美丘陵が位置し、次第に低平になりながら北東方向に櫛歯状にのびている。この丘陵地帯を開拓して東流する鳴瀬川とその支流である大小の河川は、その流域に小野田低地と呼ばれる上・中・下位面の段丘（砂礫台地）を形成しており、さらにそれに接して大崎低地へと連なる扇状地性低地が発達している。四釜地区は鳴瀬川の支流、花川流域に形成された花川（王城寺）扇状地の東端の部分にあたっている。遺跡周辺の標高は約35mである。

色麻町内にはこの花川扇状地をはじめとして扇状地、段丘、丘陵上などに旧石器時代以降の多くの遺跡の存在が知られており、現在まで91ヶ所の遺跡が確認されている（宮城県教委：1981）。このうち四釜地区周辺の花川扇状地に立地する遺跡を時代別にみてみる。

旧石器時代の遺跡には要害遺跡がある。石刃が2点出土している。

縄文時代の遺跡には西昌寺遺跡や新宿A・B遺跡などがあるが、いずれも少量の土器、石器が出土しているだけである。

弥生時代の遺跡には要害遺跡、西原A遺跡、大坊遺跡などがあり、遺跡数はわずかではあるが増加する。

古墳時代の遺跡には御山古墳や色麻古墳群、蝦夷塚古墳群などの高塚古墳がある。御山古墳は円筒埴輪を伴う直径50m前後の大型円墳であり、色麻古墳群はかつて250基以上が確認された群集墳である。このような多くの古墳の存在は周辺に同時期の集落の多数存在した可能性を示唆するが、今のところ詳細は明らかではない。

奈良・平安時代になると花川扇状地のいたるところに多くの遺跡が立地するようになる。その大部分は集落跡と考えられ、発掘調査の行われた一の関遺跡（宮城県教委：1977）では奈良時代の、上新田遺跡では平安時代の住居跡が多数発見されている（小井川：1975）。また、一の関遺跡からは、建物基壇跡や掘立柱建物跡も発見され、この遺跡は古代の寺院あるいは城柵（色麻柵）、官衙（色麻郡衙、色麻駅舎）の性格をも合せもつとされており、古代の色麻郡の中心が花川扇状地にあったことが知られる。

中世の遺跡には下黒沢内館跡、四釜城跡などの城館跡がある。



1. 佐賀市東部上原支店  
2. 阿蘇田古墳  
3. 伊  
4. 田中後遺跡  
5. 白の堀遺跡 (佐賀・平戸)  
6. 吉田遺跡  
(平戸・平戸)  
7. 大橋古墳  
8. 稲元町古墳  
9. 下馬武内古跡 (中川)  
10. 大下戸遺跡 (平戸)  
11. 丹平A遺跡  
(平戸)  
12. 河中日建跡 (佐賀・平戸)  
13. 本郷遺跡 (佐賀・平戸)  
14. 四条城跡 (中川)  
15. 五中遺跡 (佐賀)  
16. 茂昌寺遺跡 (佐賀・平戸)  
17. 国原B遺跡 (佐賀・平戸)  
18. 西原A遺跡 (佐賀)  
19. 新御山遺跡 (佐  
賀・平戸)  
20. 新城A遺跡 (佐賀・平戸)  
21. 新御山遺跡 (佐賀・平  
戸)  
22. 下城A遺跡 (佐賀・平  
戸)  
23. 下城B遺跡 (佐賀・平  
戸)  
24. 地藏堂A遺跡 (佐賀・平  
戸)  
25. 天王寺跡 (佐賀・平  
戸)  
26. 上大坊A遺跡 (佐賀・平  
戸)  
27. 上大坊B遺跡 (佐賀・平  
戸)  
28. 大坂遺跡  
(佐賀・平  
戸)  
29. 朝日六遺跡 (佐賀・平  
戸)  
30. 地蔵堂B遺跡 (佐  
賀・平  
戸)  
31. 朝日七遺跡 (佐  
賀・平  
戸)  
32. 寺台堂遺跡 (佐  
賀・平  
戸)  
33. 上野田遺跡 (平  
戸)  
34. 一の堀遺跡 (佐  
賀・平  
戸)  
35. 重正A遺跡 (佐  
賀・平  
戸)  
36. 大坂A遺跡 (佐  
賀・平  
戸)

第1図 周辺の遺跡

## II 調査の概要

### (1) 色麻古墳群上郷支群 №7

#### a 調査の方法と経過

№7は、昭和53年4月の分布調査の時点には、すでに開田によって墳丘が失われていた古墳である。しかし、その削平が比較的最近であったため、聞き取りによって位置を確認し、№7の番号を付した。この古墳は昭和25年に東北大学考古学教室が実施した分布調査で、№43の番号を付された古墳と位置的に符合することから、同一のものと思われる。この時に東西8.8m、南北9.7m、高さ2.1mの規模であったと記録されている(宮城県教委:1979)。

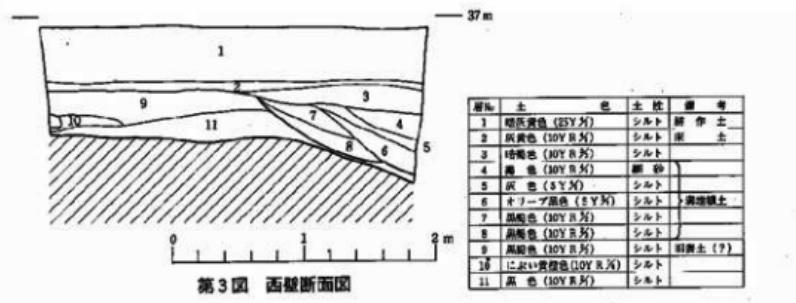
今回は墳丘の削平された№7に、周溝などの遺構が残存しているかどうかを確認することを目的に、調査を実施した。5月12日、古墳の位置していたとされる水田に3×15mの東西に細長いトレンチを設定した。調査の結果、表土下約50cmで溝が1本検出されたが、古墳に伴うと思われる遺構は検出されなかったため、№7の調査はこのトレンチ1本で終了することとした。5月13日に断面実測、写真撮影などをし、5月14日に埋め戻しを行った。



### b 発見された遺構と遺物

溝一旧表土と考えられる黒褐色土層上面で確認された。確認面で約3mの幅をもちトレンチに対してやや斜行しながら東西方向に直線的にのびている。深さは、1m以上あると思われるが、溝の堆積土から近世の陶磁器破片が底面近くまで少量づつ出土するため、この溝の掘り上げは一部に留めた。

出土遺物一溝の堆積土から出土した陶・磁器以外に、第1層から須恵器壺の破片が2点出土している。



### c 小結

発掘調査によって検出された溝は直線的にのびる大溝で、堆積中から陶・磁器片が出土することから、古墳に伴う溝ではないことが知られた。また、調査中に水田の所有者に聞いた話では、「古墳を削平するときには注意して崩したが石は1個しかなく、あとはすべて土であった。」とのことで、調査結果とも合せて考えると、No.7は古墳ではなかつた可能性が強い。

## (2) 田中後遺跡

### a 調査の方法と経過

田中後遺跡は昭和53年の分布調査のさい、土師器、須恵器が水田や畑などに散布していた遺跡で、その面積は約20,000m<sup>2</sup>と考えられた(宮城県教委:1979)。

今回の調査は遺跡の性格やその範囲を知ることを目的に、5月14日に開始した。まず、遺物の散布する畑、水田に20~40mの間隔を置いて、南北に長い4本のトレンチを任意に設定し、南からA~Dトレンチと命名した。各トレンチの規模は、A、B、Dトレンチが3×6m、Cトレンチが3×9mである。調査によって、B、C、Dトレンチから溝が検出され、各トレンチからは土師器、須恵器などの遺物が出土した。調査の終了したのは5月17日である。

## b 調査の成果

### 1. 遺構と遺物

各トレンチごとに調査の成果について述べる。

Aトレンチー最も南側の畑に設定したトレンチである。表土下約40cmで地山面に達するが、遺構は検出されなかった。出土遺物には土師器が少量ある。

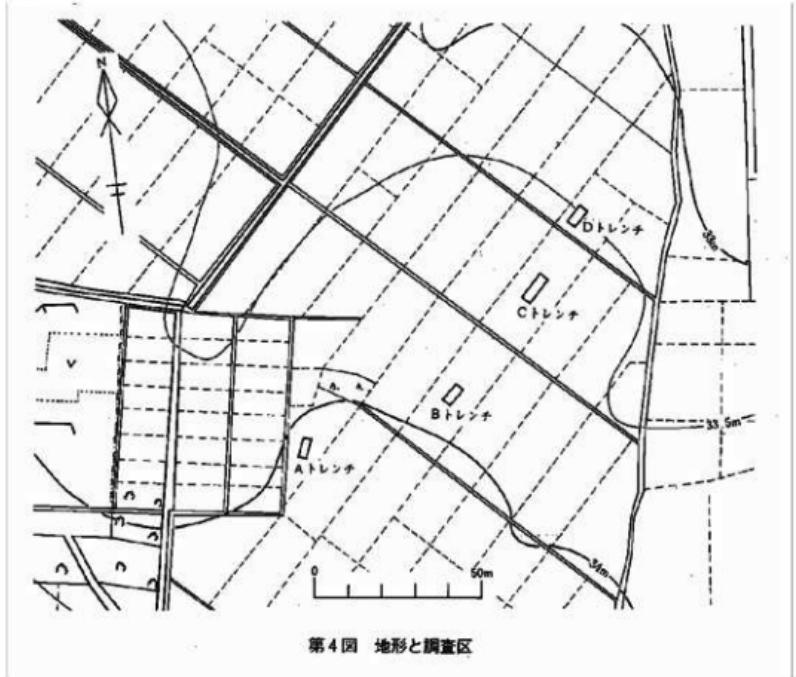
BトレンチーAトレンチの北東40mの水田に設定したトレンチである。表土下約30cmで地山面に達する。トレンチ北半の地山面で東西方向にのびる幅30cm、深さ15cmの溝が検出されたが、この溝は表土から掘り込まれたものである。出土遺物には土師器破片が1点ある。

CトレンチーBトレンチの北東35mの水田に設定したトレンチである。堆積層には次の2層が認められる。

第1層—暗褐色(10YR<sup>3/2</sup>)シルト—20~25cmの厚さをもつ、表土層である。

第2層—黒褐色(10YR<sup>3/2</sup>)シルト—約10cmの厚さをもち、その下は地山面となっている。

遺構としては第2層を掘り込んだ幅2.0m、深さ40cmの南北方向にのびる溝が1本検出された。



第4図 地形と調査区

出土遺物には第1層・第2層から出土した多くの土師器・須恵器がある。

DトレーナーCトレーナー北東20mの水田に設定したトレーナーである。Cトレーナーの第2層はこのトレーナーでは認められず、地表下約30cmで地山面となっている。遺構としては、Cトレーナーで検出された溝と規模や方向のほぼ均しい溝が1本が検出された。出土遺物には第1層から出土した少量の土師器・須恵器がある。

## 2. 出土遺物と年代

出土遺物には第1表に示したように、Cトレーナーを中心として出土した土師器（壺、高台付壺・甕）、須恵器（壺・高台付壺・蓋・甕・壺）があるが、図示できるような資料はない。

第1表でも明らかのように本遺跡出土土師器・須恵器は製作にロクロを使用するものが多く、土師器壺で、底部切離し技法の明らかなものは、すべて回転糸切り技法で切離されている。また、須恵器壺では、回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリの再調整が加えられるものとがあり、高台付壺には底部切離し後回転ヘラケズリの再調整を加えるものがある。

以上のような特徴から本遺跡出土の土師器は、土師器編年の表杉ノ入式に位置づけられるとと思われる。また、須恵器は、特に壺については底部切離しに2通りの技法がみられるが、これらは県内では表杉ノ入式の土師器と共に伴している例が報告されている。したがって、須恵器もその多くは表杉ノ入式期に相当するものと考えられる。

### c 遺跡の性格

田中後遺跡出土土器群は、前項で検討したように、表杉ノ入式期のものと考えられた。この時期の遺構は、今回の調査では検出することはできなかったが、土器が集中して出土したCトレーナー第2層は表杉ノ入式期の遺物包含層である可能性が強い。第4図に田中後遺跡周辺の微地形を示してあるが、Cトレーナーは北東方向に舌状に伸びる張り出し先端部分にあたることが知られる。このことから、田中後遺跡は住居跡などの遺構は検出されなかったものの、Cトレーナーの南側の張り出し基部を中心に形成された、表杉ノ入式期の集落跡である可能性が強く、その面積は約10000m<sup>2</sup>におよぶものと考えられる。

## III まとめ

1. 色麻古墳群上郷支群と田中後遺跡は、花川流域に形成された花川（王城寺）扇状地上に立地している。
2. 色麻古墳群上郷支群No.7では、今回の調査で古墳に伴うと思われる遺構は確認できなかった。このNo.7は古墳でなかった可能性も強い。
3. 田中後遺跡では、今回の調査で住居跡などの遺構は検出されなかったが、包含層の存在などから表杉ノ入式期の集落跡と考えられた。

## 〈引用・参考文献〉

阿部博志・千葉宗久(1980) :「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集

小井川和夫(1975) :「上新田遺跡」日本考古学年報26

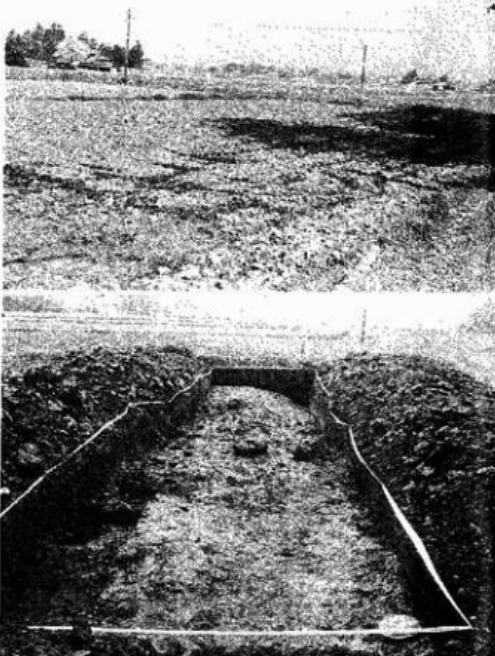
氏家和典(1957) :「東北・土師器の型式分類とその編年」歴史14輯

宮城県教委(1977) :「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』宮城県文化財調査報告書第48集

宮城県教委(1979) :「色麻古墳群」『鶴形詳細分布調査報告書(昭和53年度)』宮城県文化財調査報告書第58集

種別	器形	部位	外面-内面		田中後尾						7 秀 選			
			A	B	C	C	C	C	D	E				
			1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	1-2	1-2				
大	口縁部	口縁	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	1	1	1	4
		脚	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	-	-	3	
		底	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	2	1	2	
		不	明	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	-	-	-	2		
	体部	底	不	明	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	-	-	-	1	
		口縁部	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ト	タ	リ	一	タ	デ	1	-	-	-	1	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	
		不	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
中	体部	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		底	ケ	ズ	リ	一	タ	デ	1	2	9	13	2	41
		脚	ケ	ズ	リ	一	タ	デ	2	1	-	-	3	
		不	ケ	ズ	リ	一	タ	デ	-	-	1	-	1	
	脚	底	ケ	ズ	リ	一	タ	デ	1	2	3	-	4	
		脚	ケ	ズ	リ	一	タ	デ	1	2	1	-	1	
		底	明	ミ	タ	ナ	テ	デ	-	-	1	-	1	
		脚	タ	タ	キ	ナ	タ	デ	-	-	1	-	1	
		不	明	不	明	不	明	不	明	不	明	不	18	
洋	体部	底	出	不	明	不	明	不	明	不	明	不	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
	脚	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	2	
		不	明	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	2	
高付合	体部	底	出	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
	脚	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	3	
		不	明	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	3	
重	体部	底	出	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
重	脚	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
重	底	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		不	明	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	1	
重	底	底	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
		脚	ロ	タ	ロ	ロ	タ	ロ	ミ	ガ	キ	(黒色)	1	
計			2	1	37	26	33	47	45	4	2	197		

道路邊景



調查區



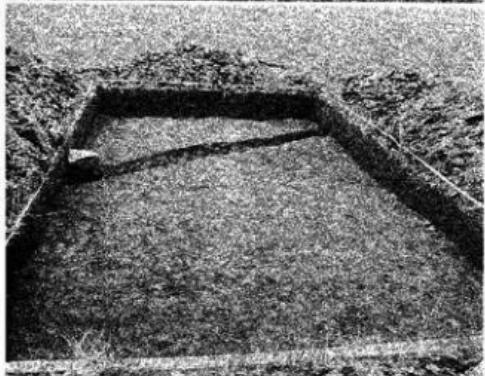
西壁斷面

圖版 1  
色麻古墳群 7

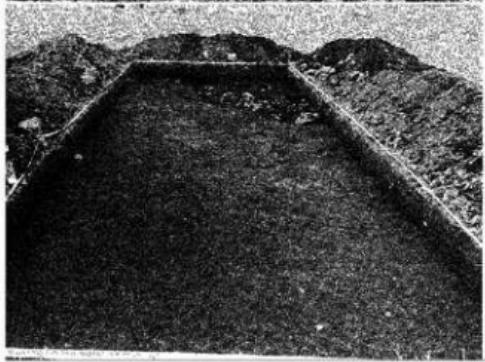
遺跡遠景



B トレンチ



C トレンチ



压中後遺跡  
図版 2

III 千賀田遺跡  
三代河原遺跡

調査要項

千賀田遺跡

遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町大字千賀田

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育委員会文化財保護課

調査員：平沢英二郎・新庄星元晴  
土岐山武

調査期間：昭和55年10月4日～8日

調査対象面積：約16000 m<sup>2</sup>

発掘面積：約 783 m<sup>2</sup>

遺跡記号：G I (宮城県遺跡地名表登録番号10086)

調査協力機関：丸森町教育委員会

三代河原遺跡

：同町大内字三代河原

：同左

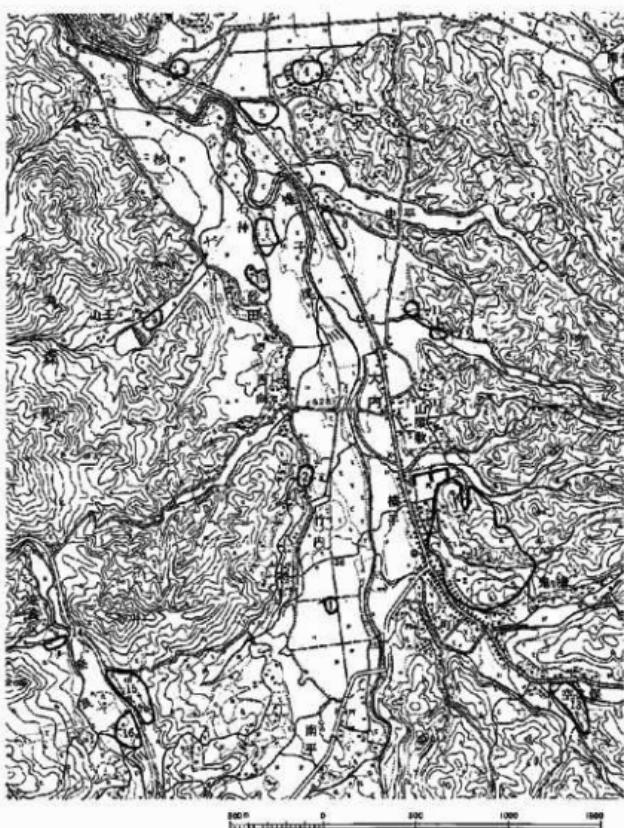
：同左

：昭和55年10月10日～17日  
：約20000 m<sup>2</sup>

： 684 m<sup>2</sup>

： G J (同番号10070)

：同左



1 千賀田遺跡	2 三代河原遺跡	3 雛田古墳
4 七夕遺跡	5 七夕西遺跡	6 桜田遺跡
7 石和遺跡	8 中平遺跡	9 山三遺跡
10 砂田遺跡	11 鶴ノ入遺跡	12 庫形城跡
13 岩ノ入遺跡	14 宗兵又遺跡	15 雉古輔遺跡
16 平遺跡		

第1図 周辺の遺跡

## I 遺跡の立地

千賀田遺跡は伊具郡丸森町大内字千賀田に所在し、丸森町の中心部から国道 113 号を南方に約 12 km 進んだ地点に位置している。三代河原遺跡は同町大内三代河原に所在し、千賀田遺跡から 0.7 ~ 0.8 km 北側に位置している。

県の最南端に位置する伊具郡丸森は東、南、北西三方をそれぞれ亘理地墨山地、阿武隈山地、角田丘陵性山地によって囲まれている。北部のみがわずかに開けて沖積低地となっておりこの低地内を阿武隈川が大きく蛇行しながら流れている。

阿武隈山地からは多くの小丘陵が派生し、そのいくつかは先端が丸森町南部まで延びているが、これら小丘陵間には新川、内川、雉子尾川などの小河川が北流しており、北部で阿武隈川にそそぎこんでいる。

千賀田遺跡はそれら河川の一つで丸森町の東部を流れる雉子尾川西岸の自然堤防上に立地している。遺跡付近は南から北にかけてゆるやかに傾斜している。標高は 34 ~ 36m で、遺跡の現状は水田である。

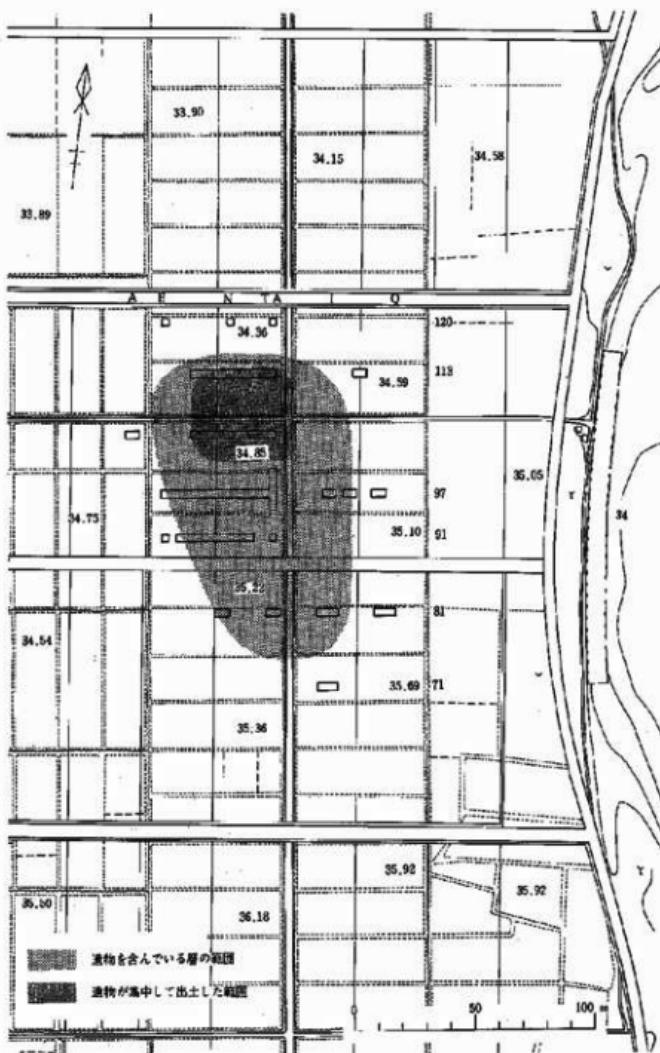
三代河原遺跡も雉子尾川西岸の自然堤防と、雉子尾川に東面する小丘陵端部斜面とにかくて立地し、標高は 30 ~ 32m で、西から東にかけてゆるやかに傾斜している。遺跡の現状は自然堤防部が水田、小丘陵端部は野菜畠および桑畠となっている。

なお、両遺跡の周辺には縄文時代の遺跡としては七夕遺跡が奈良、平安時代の遺跡としては七夕西遺跡、中平遺跡、石神遺跡などがある。

## II 調査の概要

両遺跡とも昭和 33 年用水路工事の際、遺物が出土し遺跡として登録されていた遺跡であるが、現状が水田であり、しかも限られた場所からだけの出土であったため、両遺跡とも正確な範囲を確認するまでには至っておらず、今回の調査の運びとなった。

調査の目的は遺跡の範囲、遺構の有無、遺構確認面までの深さ、及びその性格を把握することにある。調査は昭和 55 年 11 月 4 日から開始した。まず、対象地区全体に 3 × 3m を 1 とするグリットを設定し、その後それをもとに任意の調査区を設定して調査を行なうこととした。なお、基準線は千賀田遺跡は現水田区画 (N-7° -W) に、三代河原遺跡は磁北にあわせた。グリット名は 3m 単位に東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で示した。



第2図 千賀田遺跡グリッド配置図及び遺跡の範囲

### 〈千賀田遺跡〉

千賀田遺跡ではかつて遺物が出土した地点を中心に、数グリットを連結してトレンチを設定し調査を行なった。その結果、約 20 cm の厚さの水田耕作土下に褐色土層が認められた。西側にのみ分布し、最も厚い E 区で約 50 cm であるが、遺物は全く含んでいなかった。褐色土層下は黒褐色土層となる。この層は厚さが 20~30 cm あり、遺物を含んでいる。そこで、この層の広がりを確認するためその周辺に更にトレンチを設定した。その結果この層は南側から東、西、北三方向に傾斜しており、特に西側では急激に落ち込み沢状になっており、北、東、南側でも漸次、層は薄くなりなくなってしまうことが確認された。遺物は K~T-102~103 区から多数出土したが、他の区ではそれほど多くはなかった。なお、この層下は暗褐色土層（厚さ 20~30 cm）、黒色土層となる。黒色土層中には 40~50 cm 大の河原石が多くみられた。ともに遺物は含んでいない。

なお、基本的な層位をまとめると次の様になる。

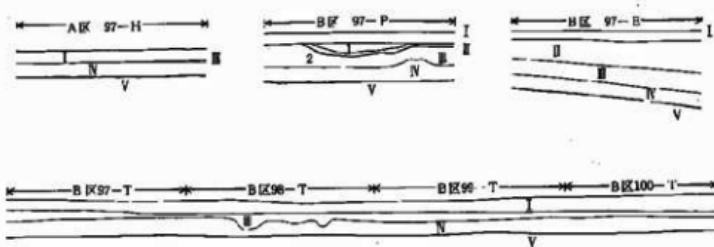
第 I 層：黒褐色土層（厚さ約 20 cm）

第 II 層：褐色土層（厚さ 0~50 cm）

第 III 層：黒褐色土層（厚さ 0~36 cm） 遺物を含んでいる。

第 IV 層：暗褐色土層（厚さ 20~30 cm）

第 V 層：黒色土層



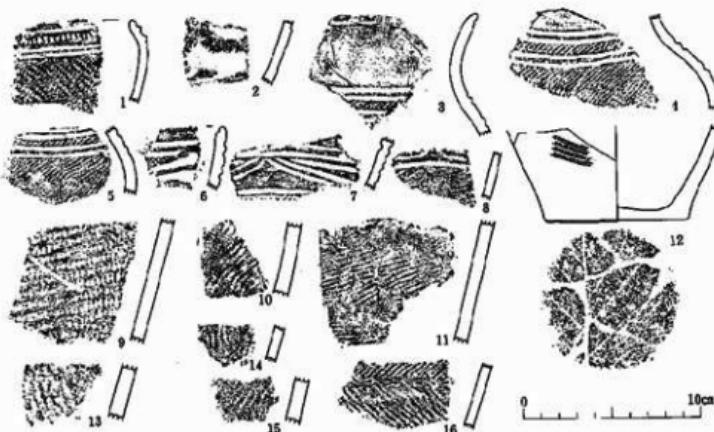
層位	土色	土性	備考
第 I 層	黒褐色（ ）	シルト	水田、耕作土である
第 II 層	褐（ ）	シルト	
第 III 層	黒褐色（2.5YR 5/6）	シルト	
第 IV 层	黒褐色（7.5YR 3/8）	シルト	褐色土層をわずかに含む
第 V 层	黒褐色（ ）	シルト	遺物混入である
第 VI 层	暗褐色（ ）	シルト	遺物を含まない
第 VII 层	黒（ ）	シルト	黒を含む、遺物を含まない



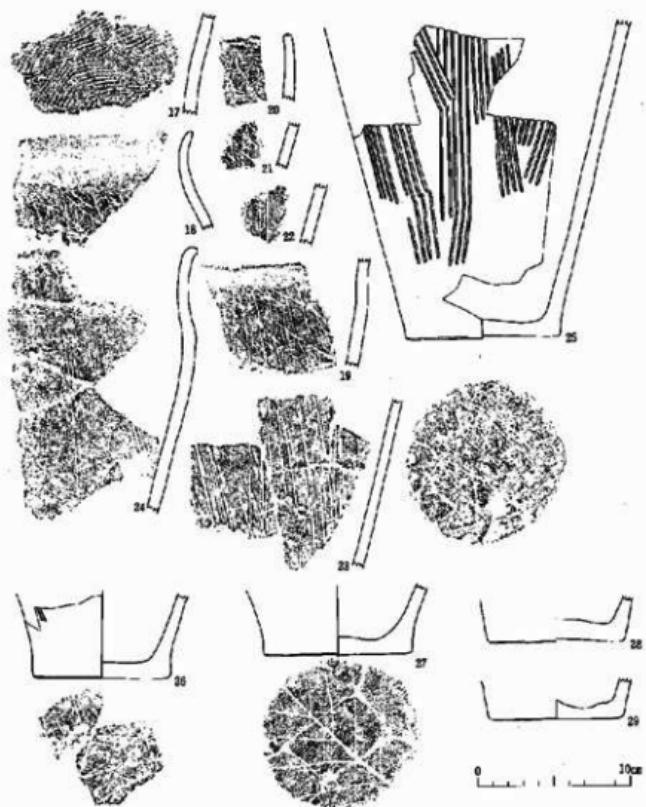
第 3 図 千賀田遺跡基本層位

(出土遺物)

基本層位第III層中から縄文土器が出土している。そのほとんどが粗製土器で、精製土器は数点だけである。しかも、その大部分が小破片のため、全体の器形については不明な点が多い。1は深鉢形土器の口縁部破片である。体部上半から口縁部にかけて外傾し、口縁部が内傾する。口縁部に数条の平行沈線からなる文様帶があり、沈線間に刺突が施されている。地文R Lの単節斜行縄文が施されている。2は皿形土器と思われる。磨消縄文技法によってX字状の雲形文が描かれている。縄文原体については摩滅が激しく不明である。いずれも時期は大洞C<sub>1</sub>式と思われる。3, 4, 5は壺形土器の口縁部と体部破片である。3は口縁部外反、4, 5は体部上半から頸部にかけて内弯する。いずれも頸部に数条の平行沈線によって区画された縄文帶がみられる。すべて地文L Rの単節斜行縄文である。いずれも時期は大洞C<sub>1</sub>式と思われる。6, 7, 8は浅鉢形土器の口縁部と体部破片である。6は口縁部外傾、7, 8は体部上半から口縁部にかけて外傾する。いずれも工字状の文様が施文されている。8は地文L Rの単筋斜行縄文が施文されている。いずれも時期は大洞A'式と思われる。9~29は深鉢形土器の口縁部、体部、底部破片である。18, 20, 24は口縁部破片であるが、18, 24は口縁部外反、20は口縁部内弯する。9~15は単節斜行縄文だけが施文されている土器で、原体は11がR Lで他はすべてL Rである。16は結節のある羽状縄文で、17は単節斜行縄文に綾格文がみられる。原体はいずれもR Lである。18~21は撚糸文が、23~26は条線がみられる。27~29について磨滅が激しく文様、地文については不明である。なお、9は沈線がめぐっている。



第4図 千賀田遺跡第III層出土遺物（1）



第5図 千賀田遺跡第Ⅲ層出土遺物（2）

## ま　と　め

1. 千賀田遺跡は雉子尾西岸の自然堤防上に立地している。
2. 基本層位第III層は遺物を含んでおり、東西約85m、南北約115mの広がりがみられる。層の厚さは0~36cmである。
3. 出土した遺物には縄文土器があるが、同層としてとらえられた土器に縄文時代晩期中葉、後葉と地点によって違う時期のものが存在することから、基本層位第III層はさらに細分される可能性が考えられる。
4. 遺跡の範囲は基本層位第III層の広がりから東西約85m、南北約115mと思われる。遺物の出土数はK~T-102~103区から非常に多く出土しているが、他の区からの出土数はそれほど多くはない。
5. 今回の調査では遺構は検出されなかった。

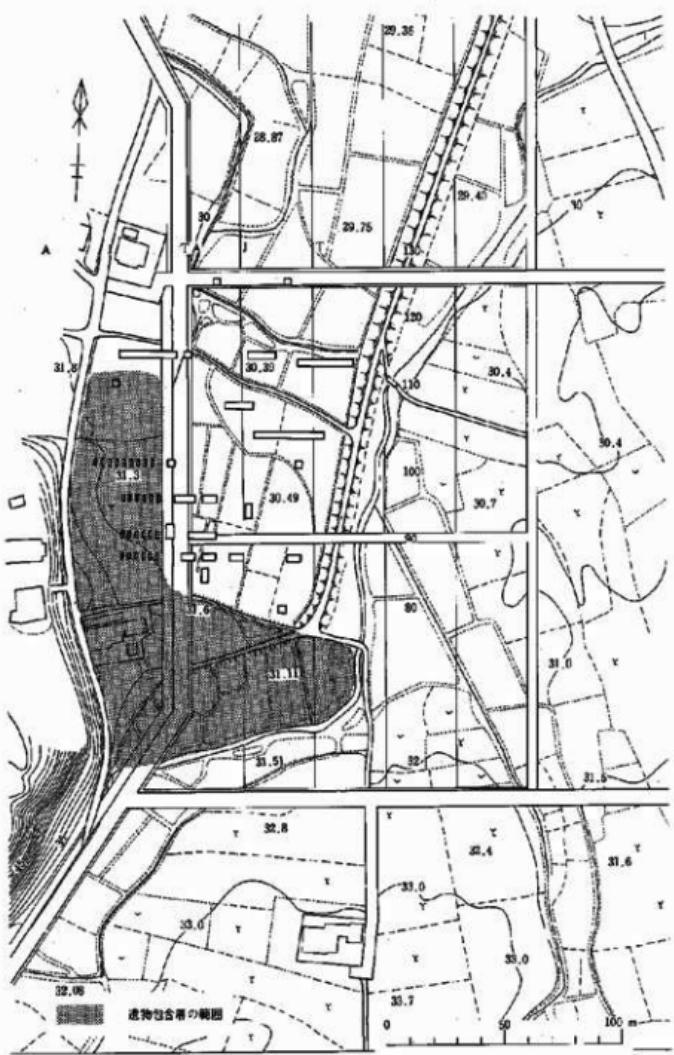
### 〈三代河原遺跡〉

三代河原遺跡ではトレンチを設定し調査を行なった。畑では耕作土の厚さは15~20cmあり、これを取り除くと北側では以前丘陵斜面を削りとて畑にした際の整地層が広がっていたが、南側ではみられなかつた。厚さは0~10cmである。この層下はにぶい黄褐色土層で、風化した礫灰岩の粒を多く含んでいる。厚さは35~40cmである。遺物は含んでいない。さらに掘り進めると黒褐色土層となる。この層は南側の方が厚く8~18cmあり、遺物を含んでいる。この層の広がりを確認するためにさらに南側の桑畑にも調査区を設定した所この層は桑畑一体に広がっていることが確認された。この層下は暗褐色土層で、厚さは14~20cmあり、遺物は含んでいない。

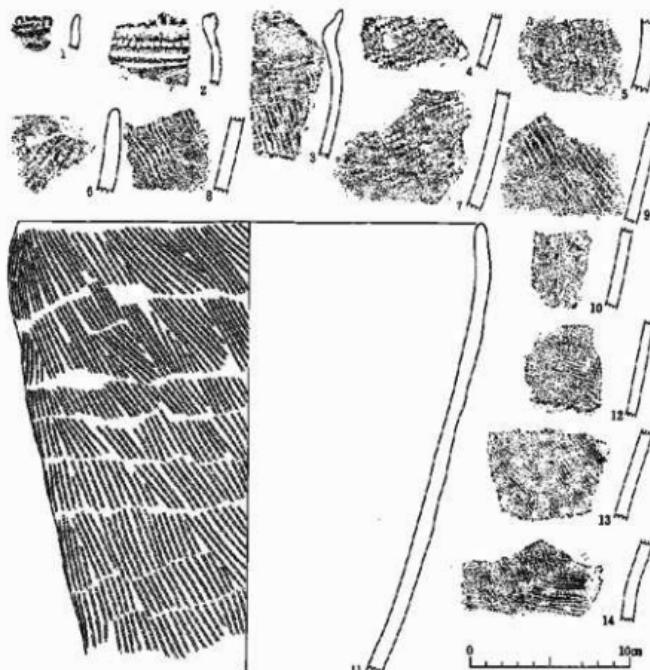
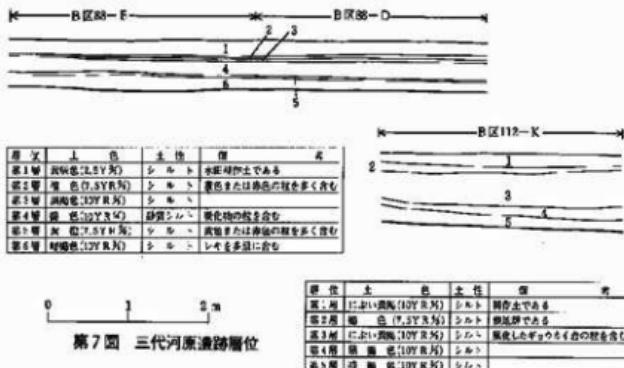
水田では水田耕作土直下から縄文土器、土師器が混在して出土しているが、耕作土下には砂層、礫層が広がっており、水田部分はかつて雉子尾川の氾濫原であることが確かめられた。

なお、基本的な層位について畑および桑畑が存在する丘陵端部についてのみまとめてみると次の様になる。

- |                |                        |
|----------------|------------------------|
| 第I層：にぶい黄褐色土層   | (厚さ 15~20 cm)          |
| 第II層：褐色土層      | (厚さ 0~10 cm)           |
| 第III層：にぶい黄褐色土層 | (厚さ 35~40 cm)          |
| 第IV層：黒褐色土層     | (厚さ 8~18 cm) 遺物を含んでいる。 |
| 第V層：暗褐色土層      | (厚さ 14~20 cm)          |



第6図 三代河原道跡グリッド配置図及び遺跡の範囲



第8図 三代河原遺跡出土遺物

### (出土遺物)

大部分が畠および桑畠の基本層位第IV層からの出土であり水田からの出土はほとんどない。出土遺物には縄文土器があるが、そのほとんどが小破片であり、全体の器形の判明する土器は1点しかない。1, 2は深鉢形土器の口縁部破片である。1は口縁部わずかに外反、2は口縁部内弯する。いずれも数条の平行沈線が施文されており、沈線間に刺突が施されている。2は口縁部にも刺突が施文されている。時期は晩期後半と思われる。3~14は深鉢形土器で、11はほぼ完形だが、他は口縁部と体部の破片である。11は体部から口縁部にかけて外傾。口縁部わずかに内弯する。3, 6は口縁部破片であるが、3は口縁部外反、6は口縁部外傾する。3~9は単節斜行縄文が、10~14は撚糸文が施文されている。

## ま　と　め

1. 三代河原遺跡は雉子尾川西岸の自然堤防および丘陵端部に立地している。
2. 遺物は現在野菜畠と桑畠となっている丘陵端部の基本層位第IV層からの出土が大半で、水田となっている自然堤防部からはほとんど出土しなかった。
3. 出土した遺物には縄文土器があり、時期は縄文時代晩期後半に属するものと思われる。
4. 遺跡の範囲は基本層位第IV層の広がりから東西約85m、南北約115mにわたり、野菜畠の一部と桑畠一体に広がるものと思われる。なお、層の厚さは8~18cmである。
5. 今回の調査では遺構は検出されなかった。

千貫田遺跡風景  
(西側から)



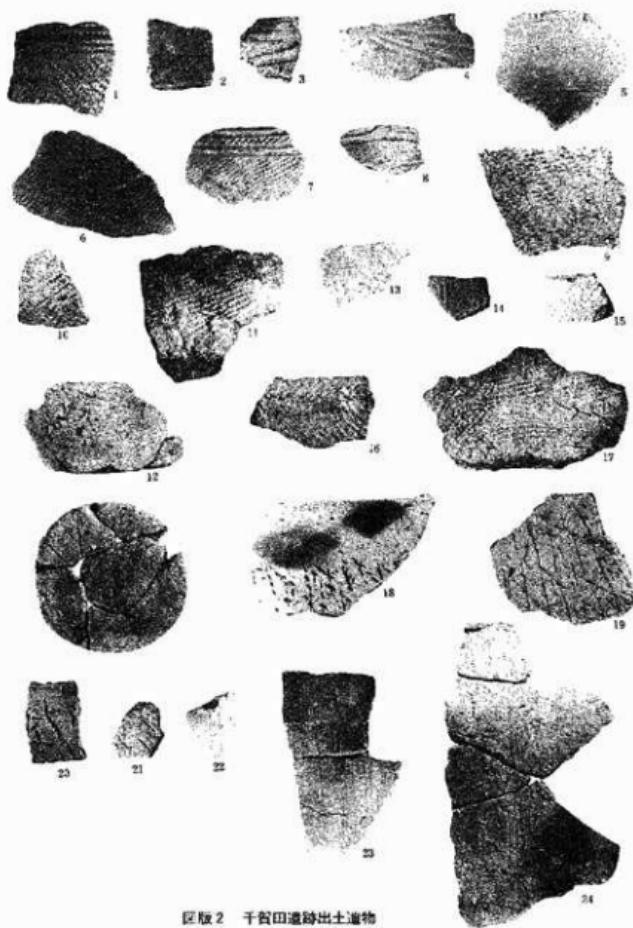
トレンチ発掘状況  
(西側から)



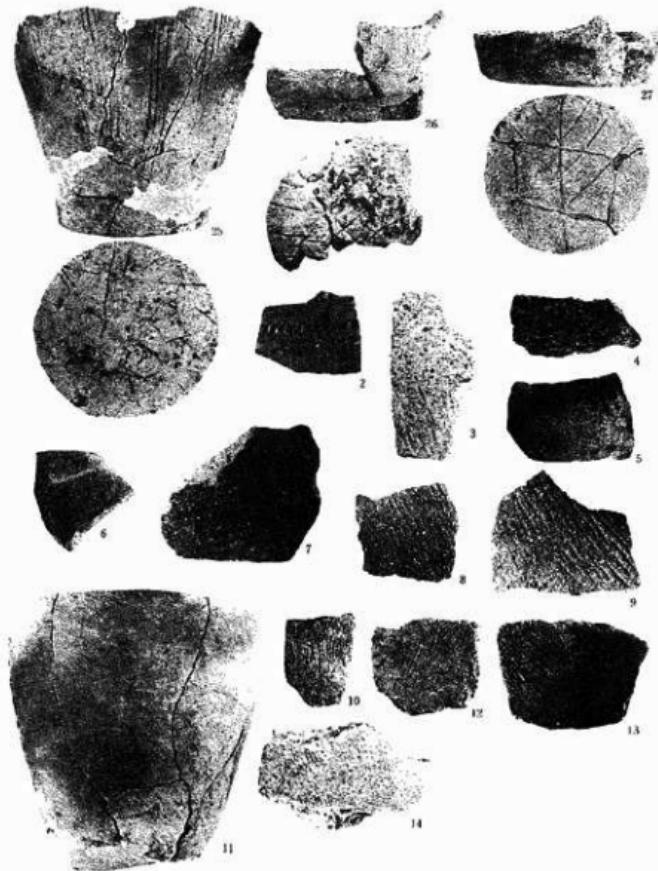
遺物出土状況  
(東側から)



図版1



图版2 千智田遗址出土遗物



图版3 千首田清跡、三代河原遺跡出土遺物